— 茨城県土浦市 —

二又遺跡

── ミニゴルフ場造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 ──

2002

常総実業株式会社
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

— 茨城県土浦市 —

二又遺跡（ふたまた）

— ミニゴルフ場造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

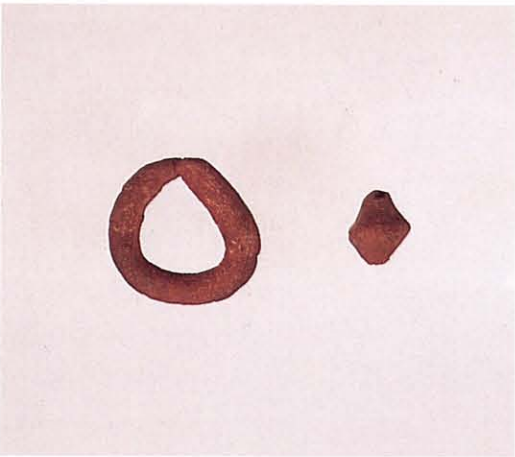
2002

常総実業株式会社
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

5号住居址カマド

6号住居址出土須恵器

1号住居址出土ガラス小玉



5号住居址出土土製品

序

土浦市は霞ケ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため市内には貝塚、古墳、集落跡など数多くの遺跡が存在しております。これらの遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなることはもちろんのこと、現代の私達が豊かに生活することのできる先人の偉業でもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な責務であり、郷土の発展のためにも重要なことと思われます。

このたびの調査は、常総実業株式会社のミニゴルフ場造成工事に伴う、二又遺跡発掘調査による記録保存を目的として行われたものであります。

遺跡からは、古墳時代から平安時代の竪穴住居址が確認されました。この中から、市内では出土例の少ない古墳時代（5世紀代）の須恵器が完全な形で発見され、非常に貴重な出土例といえます。

この調査によって、市内西部中村西根地区の古代文化の究明にいささかなりとも役立てて頂ければ幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行にあたり、常総実業株式会社をはじめ、関係各位の皆様のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

土浦市教育委員会
教育長　尾見彰一

例　言

1．本書は、ミニゴルフ場造成工事に伴う、土浦市中村西根1099－1番地に所在する二又遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は常総実業株式会社の委託を受け、土浦市遺跡調査会が実施した。
3．調査期間は平成6(1994)年9月6日から9月28日である。
4．発掘調査は関口　満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）、遺物整理及び本書の作成は福田礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場埋蔵文化財担当臨時職員）が担当した。
5．本書の執筆は、第1章・第4章・第5章を関口、第2章・第3章を福田が行い関口が補筆した。
6．整理作業の分担は下記のとおりである。
　遺物実測：福田　石山春美　中村節子　長嶺道子
　遺物･遺構トレース･図版作成：福田
　遺物写真：関口
　墨書土器の赤外線カメラ撮影は(財)茨城県教育財団にご協力頂いた。
7．調査及び報告書の作成には下記の諸機関・方々によりご協力・ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。(敬称略)
　茨城県教育委員会　茨城県県南教育事務所　(財)茨城県教育財団　常総実業株式会社　赤井博之　岡林耕作　川井正一　川西宏幸　瓦吹 堅　鏑木　洋　酒井清治　鈴木素行　塚井善一郎　米川仁一
8．本遺跡の出土品・報告書作成に伴う資料は全て上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管する。

凡　例

1．遺構図中の断面図・土層図脇の数値は海抜高を表し、単位はmである。
2．遺構図中のピット脇の数値は床面からの深さを表す。
3．土層･実測遺物の色調における色相の判断は『新版　標準土色帖』（日本色研事業株式会社）を使用した。
4．出土状況図中の●は土器を表し、実線は接合関係を示す。
5．遺構・遺物実測図の縮尺は基本的に下記のとおりである。その他のものもスケールを明記してある。

遺構	竪穴住居址	····1／60・1／30	遺物	土器·····1／2・1／3・1／4
	土　　坑	····1／40		土製品·····1／1・1／2
				石器·····1／2

6．本文･表中の（　）は現存値、〔　〕は推定値を表す。
7．遺構図中の破線は推定線、一点鎖線は硬化面を表す。
8．図版中のスクリーントーンの表現は、以下のとおりである。

須恵器　黒色処理　赤彩　繊維　灰釉陶器　タール状付着物　砥面　粘土

9．砥石のスクリーントーン・← →は砥面、□は切り出し面を表す。
10．遺物観察表中の法量計測はA：口径、B：底径、C：器高、D：高台径、E：高台高である。
11．遺物実測図中の中心線が一点鎖線のものは、回転（復元）実測を示す。

土浦市遺跡調査会組織（平成6年度）

会　長	須田　直之	土浦市文化財保護審議会長
副会長	青木　利次	土浦市教育委員会教育長
理　事	大塚　　博	土浦市文化財保護審議会委員
	廣田　宣次	土浦市企画課長
	野口　幹雄	土浦市区画整理課長
	雨貝　　宏	土浦市建築指導課長
	山田　和也	土浦市都市計画課長
	内海崎保生	土浦市耕地課長
	大塚　重治	土浦市土木課長
監　事	矢口　　寛	土浦市教育委員会教育次長
	飯田　章二	土浦市監査事務局長
幹事長	宮本　　昭	土浦市教育委員会文化課長
幹　事	小貫　俊男	土浦市教育委員会文化課文化財係長
	塩谷　　修	土浦市教育委員会文化課主幹兼土浦市立博物館学芸員
	石川　　功	土浦市教育委員会文化課主幹
	黒澤　春彦	土浦市教育委員会文化課主事
	中澤　達也	土浦市教育委員会文化課主事
	関口　　満	土浦市教育委員会文化課主事
	橋場　君男	土浦市教育委員会文化課臨時職員

調査者名簿

現地調査

調査主任	関口　　満				
調 査 員	橋場　君男				
作 業 員	飯田まきの	小野　　豊	飯村　洋子	岡本　君子	大久保由紀子
	上高原満代	近藤　邦男	辻本千賀子	富島　利治	長嶺　道子
	中村　節子	槙田　整子	増谷ふさ子	松延貞次郎	渡辺　恒子

整理作業

調査主任	関口　　満			
調 査 員	福田　礼子	中野耕太郎	吉野　健一	吉澤　　悟
作 業 員	石山　春美	大坪美知子	中村　節子	長嶺　道子
事 務 員	中村　博子	鈴木ひと美		

目　次

巻頭カラー（5号住居址カマド、6号住居址出土須恵器、5号住居址出土土製品、1号住居址出土ガラス小玉）
序
例言
凡例
調査会組織・調査者名簿
第１章　調査に至る経緯・経過 …… 1
第２章　遺跡概観 …… 4
第３章　検出された遺構と遺物 …… 8
　第１節　竪穴住居址 …… 8
　第２節　遺構外出土遺物 …… 28
第４章　考察 環状土製品について …… 33
第５章　調査のまとめ …… 39
写真図版
報告書抄録

図版目次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　調査区設定図 …… 3
第３図　周辺の遺跡位置図 …… 5
第４図　遺構配置図 …… 7
第５図　1号住居址 …… 9
第６図　1号住居址出土遺物 …… 10
第７図　2号住居址 …… 12
第８図　2号住居址出土遺物 …… 13
第９図　3号住居跡 …… 15
第10図　3号住居址出土遺物 …… 16
第11図　4号住居址 …… 17
第12図　4号住居址遺物出土状況 …… 18
第13図　4号住居址出土遺物－１ …… 19
第14図　4号住居址出土遺物－２ …… 21
第15図　5号住居址カマド …… 22
第16図　5号住居址 …… 23
第17図　5号住居址出土遺物 …… 25
第18図　6号住居址・出土遺物 …… 27
第19図　遺構外出土遺物－１ …… 29
第20図　遺構外出土遺物－２ …… 31
第21図　環状土製品の類例と参考資料 …… 34

写真図版

ＰＬ１　遺跡位置写真(国土地理院 昭和52年撮影)
ＰＬ２　調査区遠景(国道354号より）、調査区近景(国道354号方面をのぞむ)
ＰＬ３　調査区全景(1)、調査区全景(2)
ＰＬ４　1･6号住居址完掘、1号住居址遺物出土、1号住居址覆土
ＰＬ５　2号住居址完掘、2号住居址カマド遺物出土、3号住居址完掘
ＰＬ６　3号住居址カマド遺物出土、4号住居址完掘、4号住居址カマド遺物出土
ＰＬ７　5号住居址完掘、5号住居址カマド完掘、5号住居址カマド完掘
ＰＬ８　1号住居址１～７
ＰＬ９　1号住居址8･10～12、2号住居址2･3･５～8、3号住居址1～4
ＰＬ10　4号住居址1～9
ＰＬ11　4号住居址10･12～21
ＰＬ12　4号住居址22～26、5号住居址1～4
ＰＬ13　5号住居址5･7～11、6号住居址1、遺構外34～38
ＰＬ14　遺構外39～48
ＰＬ15　遺構外縄文土器(1)、遺構外縄文土器(2)、 遺構外縄文土器(3)、遺構外弥生土器
ＰＬ16　墨書土器赤外線写真(4号住居址９･14)

第１章　調査に至る経緯・経過

平成５年12月８日に常総実業株式会社より、土浦市開発行為指導要綱に基づく事前協議申請書が提出された。その内容は約43,396㎡の市街化調整区域の土地において、ミニゴルフ場建設工事事業を行なうという趣旨のものであった。このことを受け土浦市教育委員会では、遺跡台帳との照合を行った。申請地の大半は低湿地であり水田として利用されていたが、一部は台地であり、「周知の遺跡」である二又遺跡の範囲内に該当していた。この後現地踏査を実施したところ、申請地の二又遺跡部分は山林となっており、遺物の採集は困難であったが、削平された台地端部に土器片の散布が見られた。このような現地の状況を踏まえ、事業主宛てに埋蔵文化財の内容把握と範囲確認のための試掘調査の協力要請を行った。

試掘調査は平成６年３月４日に実施することになった。トレンチの設定は、樹木伐採の制限等があり、全体には設定できず台地西側を中心に設定した。そして重機を使用して調査した。この結果、台地中央部分のトレンチ内の表土は浅く遺物は確認されず、西側のトレンチでは表土も厚く堆積し、竪穴住居址が２軒確認された。竪穴住居址は、出土した遺物から平安時代のものと考えられた。この他に縄文時代の遺物も出土した。

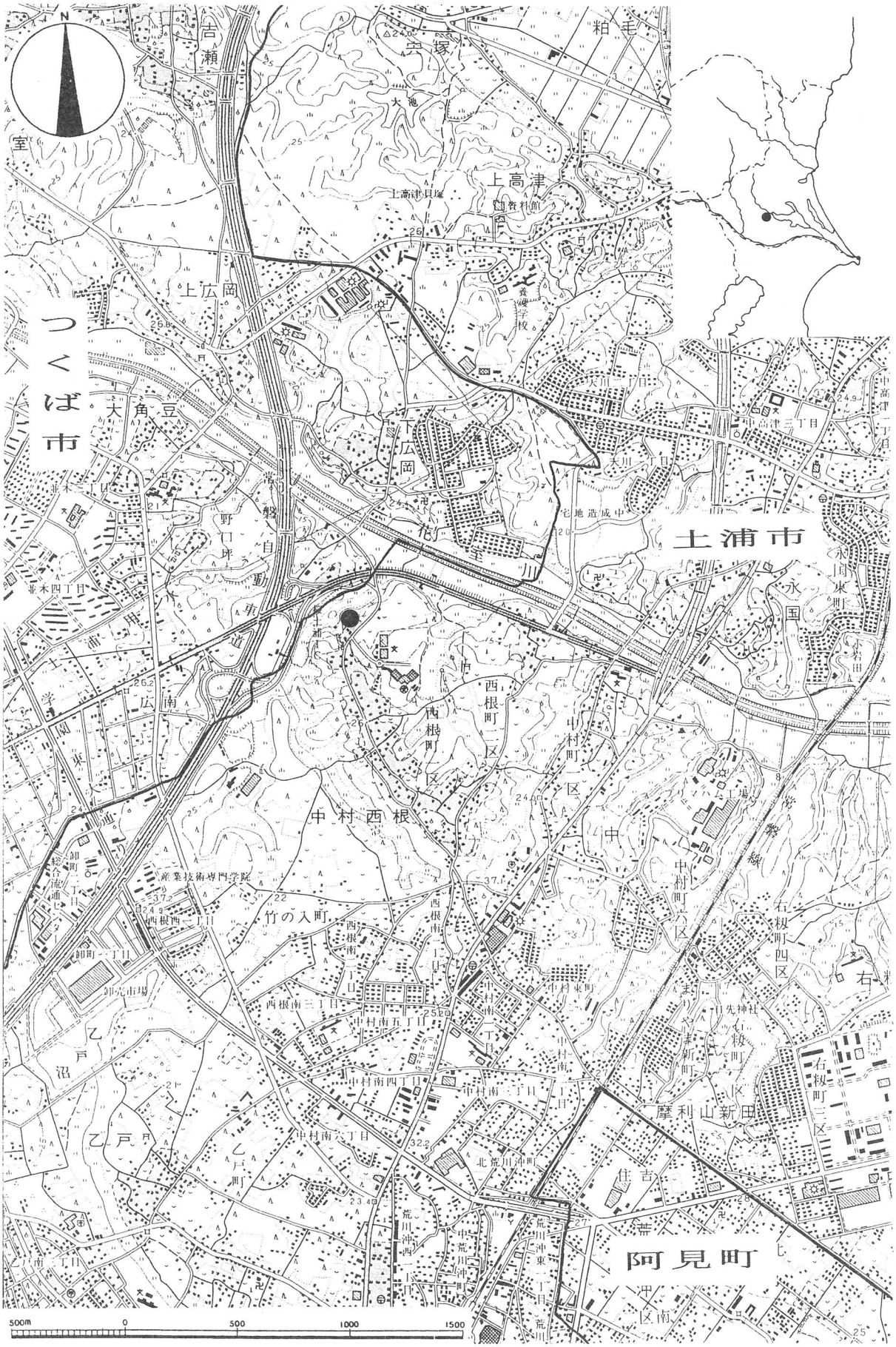
この後、土浦市教育委員会では試掘調査の状況をまとめ、事業主宛「申請地で現状変更を行う場合は、埋蔵文化財の発掘調査が必要となる」旨を報告した。そして、事業主と市教育委員会との間で、埋蔵文化財の取扱についての協議を重ねた。協議は難航したが、申請地の工事計画では台地の造成事業が予定され、現状保存が困難であることから、発掘調査により埋蔵文化財の記録保存を行うことで合意した。

その後、事業者の意向で一時このミニゴルフ場建設事業は中止となったが、平成６年６月１日に事業者が再度事前協議申請書を提出し、発掘調査についても行うことになった。発掘調査にあたって、同年６月10日に調査エリアの設定を行った。その直後、工事が始まり、調査エリア以外は掘削され、舌状台地は島状に削られた。

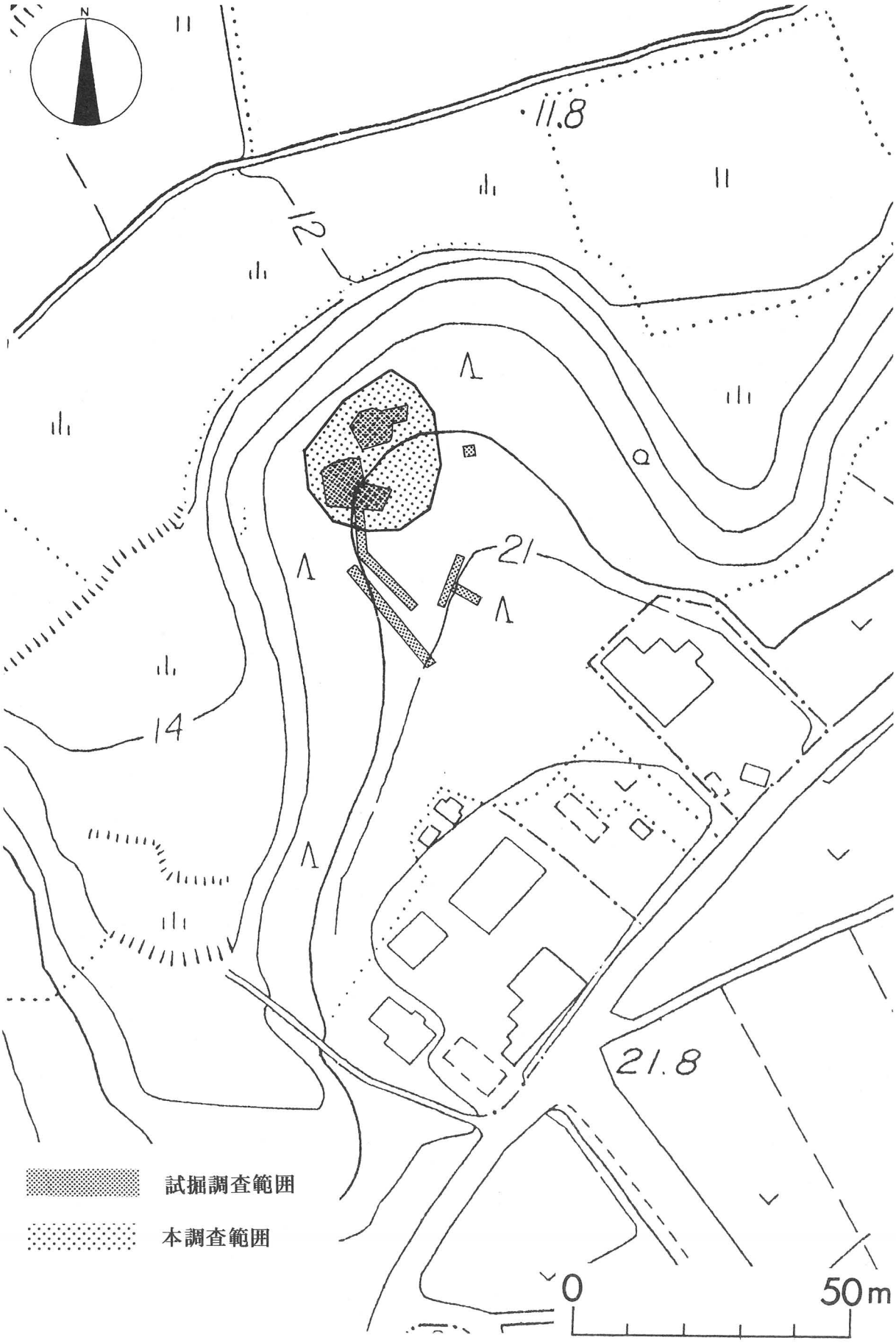
実際の発掘調査は平成６年９月６日から実施され、９月28日まで行われた。発掘調査は土浦市教育委員会が土浦市遺跡調査会に依頼し実施した。

調査経過

平成６年　９月６日　器材の搬入。テント設営と遺構確認。
　　９月７日　１・２号竪穴住居址の所在する東側から調査開始。
　　９月20日　１・６号住居址調査終了。
　　９月21日　２・５号住居址調査終了。
　　９月26日　３号住居址調査終了。
　　９月27日　４号住居址調査終了。
　　９月28日　遺跡の全景を撮影し、その後テントの解体と器材の撤収を行う。



第1図　遺跡位置図　（国土地理院発行 1/25,000 に加筆）



第２図　調査区設定図

第２章　遺跡概観（第1～3図：ＰＬ１～３）

本遺跡は土浦市中村西根1099－1の番地に所在し、行政区分上のつくば市と隣接している。土浦市は茨城県南部に位置し、関東平野の一角を担っている。市の北側には筑波山がそびえ、東側には広大な霞ヶ浦を望んでいる。土浦市の地形は、市内のほぼ中央を霞ヶ浦へと流れる桜川により形成される低地部と、筑波山塊より南東方向に延びる新治台地、桜川の南側に位置する筑波稲敷台地の三者よりなる。この筑波稲敷台地の北側には、北西より花室川が桜川とほぼ平行して流れている。花室川の中流から下流にかけての台地両側は開析が進み、狭い谷津と小規模な台地が複雑に形成されている。

二又遺跡はこの花室川のほぼ中流、南岸にあり、南西方向に侵入する谷津に面した小規模な舌状台地上に位置している。標高はおよそ18mである。

花室川流域は河川に面した台地上という地の利から、多くの遺跡が確認されている。

旧石器時代では南岸の西根宮脇遺跡(6)・向原遺跡(24)・宮前遺跡(40)等で遺物が出土している。向原遺跡では立川ローム軟質部よりユニットが検出されている。

縄文時代では早期に入り、向原遺跡・宮前遺跡から土坑が検出されている。特に向原遺跡では17基の陥し穴が台地上に直線的に配列していた。前期になると、竪穴住居址が右籾貝塚東遺跡(41)・向原遺跡・権現前遺跡(39)などで散見されるようになる。中期になると、宮前遺跡・下広岡遺跡(70)などで阿玉台式終末から加曽利E式期の群在する貯蔵穴を伴う集落址が見られる。後期から晩期にかけては遺跡数こそ減少するが、北岸には学史的にも古くから知られている上高津貝塚(66)が位置している。

続く弥生時代は希薄であり、北岸のうぐいす平遺跡(59)や宍塚古墳群(68)から後期の竪穴住居址が検出されるに留まる。このような状況は、市域北部の原田遺跡群等の様子とは全く様相を異にする。

古墳時代の遺跡として、二又遺跡に近接した場所では、下広岡遺跡や中新台遺跡(4)で集落址が形成されている。特に中新台遺跡では、後期の竪穴住居址内のカマド及びその周辺から、勾玉や管玉等の土製模造品が多数出土しているのが特筆される。二又遺跡と同じ台地に位置し興味深い。この他、寄居遺跡(60)や向原遺跡では前期から後期にかけての集落が継続して営まれている。

古墳は、南岸に発掘調査が実施された向原遺跡があり、円墳と長方形墳が１基ずつ確認され7世紀後半から8世紀前半に位置付けられている。この他に不動堂古墳群(3)・浅間古墳(19)・大日古墳(18)等がある。北岸では寺家ノ後Ｂ遺跡・十三塚Ｂ遺跡(53)で古墳が調査され、それぞれで古墳時代終末期の方墳が確認された。この他、宍塚古墳群・幕下女騎古墳(61)等が存在する。

奈良・平安時代では寄居遺跡、うぐいす平遺跡でまとまった集落跡が、南岸の内路地台遺跡(44)からは平安時代の竪穴住居址２軒と火葬墓が２基検出されている。

中世では、高井城址(73)を中心として、下高津小学校前遺跡(62)・宮脇Ｂ遺跡(57)・新町遺跡(58)・うぐいす平遺跡などが存在する。

第3図　周辺の遺跡位置図

（国土地理院発行 1/25,000 に加筆）

No.	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世	No.	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
1	二又		○		○	○			40	宮前	○	○		○		○	
2	後稲		○			○			41	右籾貝塚東		○					
3	不動堂古墳群				○				42	右籾宮塚		○					
4	中新台				○	○			43	右籾館址						○	○
5	堂場台					○			44	内路地台		○			○		
6	西根宮脇	○			○	○			45	牧の内					○	○	
7	笹崎		○						46	右籾十三塚					○		
8	石橋台		○						47	永国	○	○	○	○	○		
9	西所在塚							○	48	亀井				○	○		
10	竹ノ入		○						49	和台		○	○	○			
11	西根長峰		○		○	○			50	寺家ノ後A				○			○
12	高山					○			51	寺家ノ後古墳群				○			
13	後門		○		○				52	十三塚A						○	○
14	乙戸町庚申塚							○	53	十三塚B				○		○	○
15	西根平				○	○			54	永国十三塚						○	○
16	諏訪					○			55	宮脇庚申塚		○					○
17	平代地		○			○			56	宮脇A					○		
18	大日古墳				○				57	宮脇B		○			○	○	
19	浅間古墳				○				58	新町					○	○	
20	白楽所在塚							○	59	うぐいす平			○	○	○		
21	南達中B				○	○			60	寄居		○		○	○	○	
22	馬道				○	○	○		61	幕下女騎古墳				○			
23	馬道古墳群				○				62	下高津小				○	○	○	
24	向原	○	○		○				63	弁天社東				○	○		
25	向原古墳群				○				64	西原				○	○		
26	谷原門A		○		○	○			65	出シ山					○		
27	谷原門B					○			66	上高津貝塚		○		○	○		
28	谷原門C		○			○			67	栗崎		○		○			
29	嵩久保一里塚							○	68	宍塚古墳群	○		○	○			
30	天神					○			69	下大角豆		○					
31	扇ノ台		○			○			70	下広岡		○		○			
32	木の宮北		○						71	大角豆		○	○				
33	木の宮南A		○	○					72	千現塚古墳				○			
34	木の宮南C		○						73	高井城址						○	
35	木の宮南B		○			○											
36	峰崎A		○														
37	峰崎B		○														
38	峰崎C		○			○											
39	権現前		○			○											

周辺遺跡一覧

参考文献

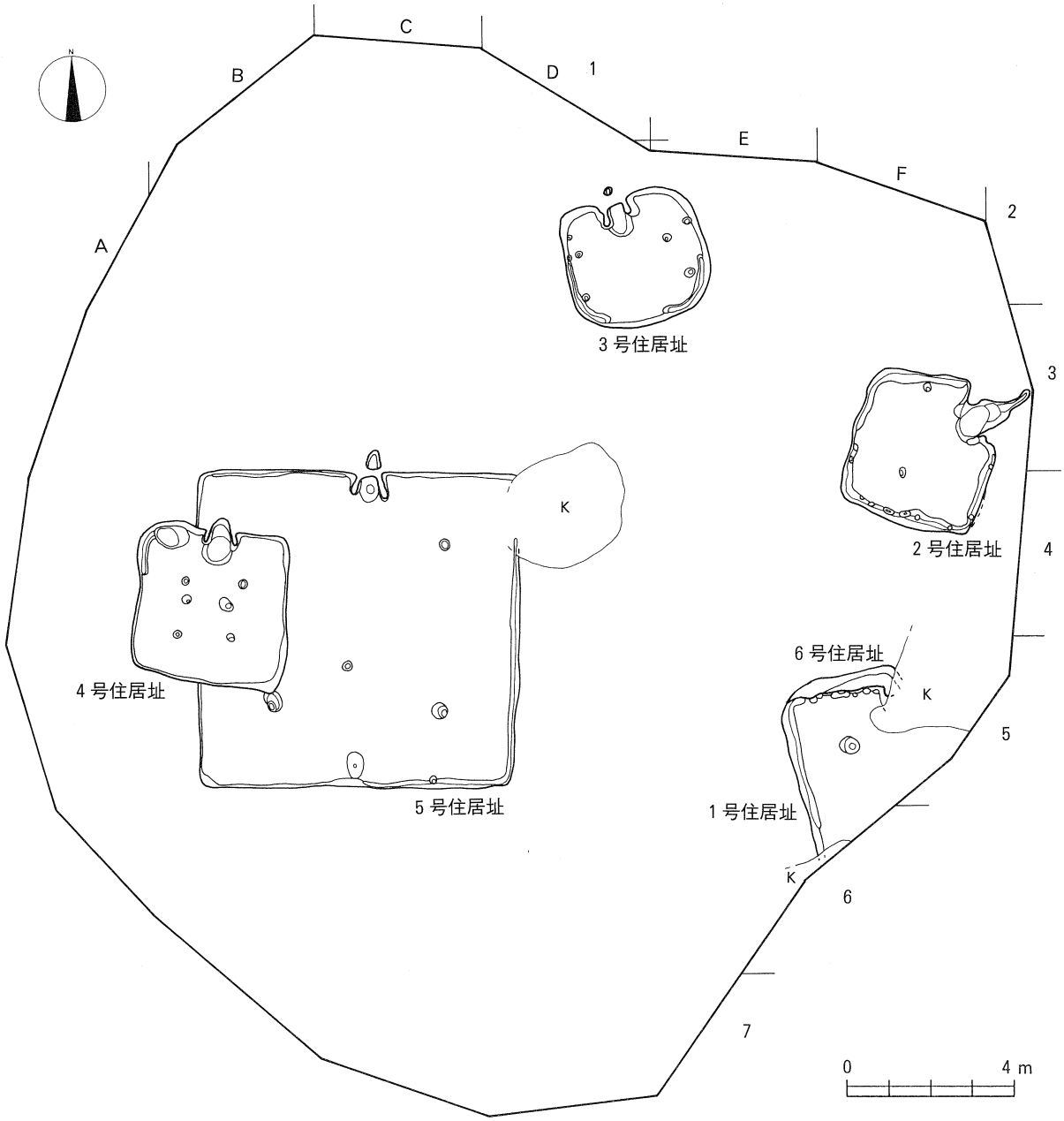
国学院大学宍塚調査団『常陸宍塚』1971

桜村教育委員会『桜村史』(上巻) 1983

土浦市教育委員会『土浦の遺跡―埋蔵文化財包蔵地―』1984

向原遺跡調査会 土浦市教育委員会『向原遺跡』1987

(財)茨城県教育財団『寺家ノ後A遺跡 寺家ノ後B遺跡 十三塚A遺跡 十三塚B遺跡 永国十三塚遺跡 旧鎌倉街道』茨城県教育財団文化財調査報告第60集 1990



第４図　遺構配置図

(財)茨城県教育財団『西郷遺跡 南丘遺跡 長峰遺跡 数光遺跡 宮塚遺跡 右籾館跡 内路地台遺跡』 茨城県教育財団文化財調査報告第64集 1991

(財)茨城県教育財団『寄居遺跡 うぐいす平遺跡』 茨城県教育財団文化財調査報告第84集 1994

(財)茨城県教育財団『右籾貝塚東遺跡 内路地台遺跡 念代遺跡 平坪遺跡』 茨城県教育財団文化財調査報告第111集 1996

土浦市教育委員会『中新台遺跡発掘調査報告書』1996

(財)茨城県教育財団『宮前遺跡』 茨城県教育財団文化財調査報告第118集 1997

上高津貝塚ふるさと歴史の広場「宮脇Ｂ遺跡」『土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第3号 1998

第３章　検出された遺構と遺物

調査範囲内より６軒の住居址が検出された。内訳は古墳時代中期１軒、古墳時代後期２軒、平安時代３軒である。住居址は東側でやや密に、いずれも近接して配置しており、うち４軒は重複していた。住居址以外の遺構は確認されていない。検出された順に住居址番号を付しており、記載も住居址番号に倣い述べていくこととする。

第１節　竪穴住居址

１号住居址（第５・６図：ＰＬ４・８・９）

位置　Ｅ・Ｆ―５・６グリットに位置する。住居址南側は調査区外に延びており、東側は撹乱により大きく壊されていた。また北側で６号住居址と重複しており、覆土の観察から本址が新しいことが判明した。

規模・形状　（３.９）×（４.７）ｍの方形を呈する。壁はやや外傾して立ち上がり、深さは最深部で74㎝を測る。西側の一部に壁溝が巡っており、幅は10～16㎝、深さは３㎝前後であった。

主軸方向　Ｎ－12°－Ｗ

床　ほぼ平坦であり、硬化面は確認されなかった。北壁と西壁際には壁溝が部分的に巡る。

ピット　北側の壁際に円形・楕円形を呈する径12～25㎝のピットが８ヶ所検出された。いずれも浅いものであった。また北西側に楕円形を呈する、長径50㎝のピットが1ヶ所位置する。深さは26㎝を測る。このピットは主柱穴と考えられ、本住居址は本来４本柱の柱穴構造を持つものと考えられる。

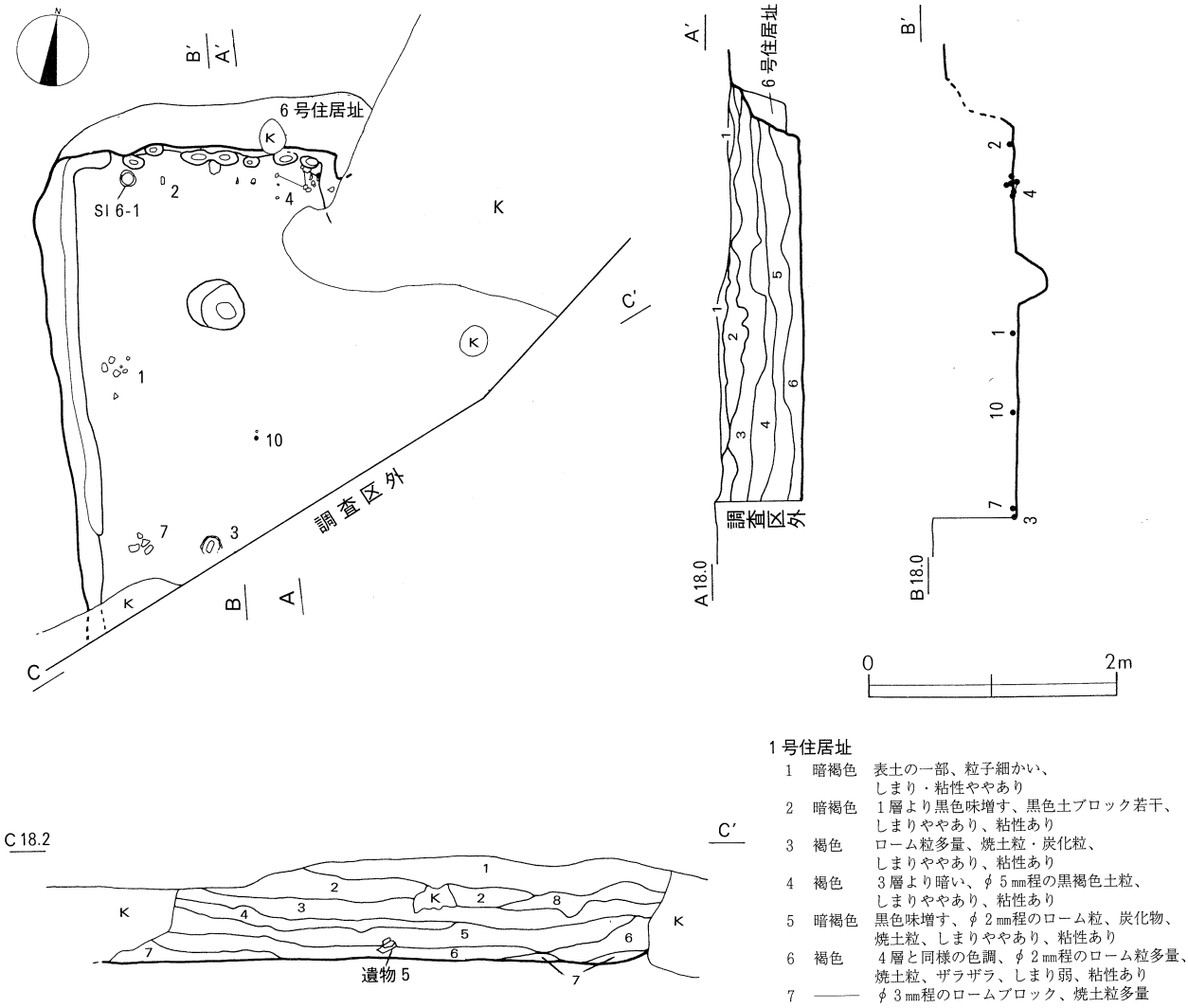
カマド　北壁に構築されるが、西側の袖部が一部残存するのみで、大きく撹乱により壊されていた。カマド袖西側には焼土の堆積が見られ、その下から４の土器が割れて出土した。

覆土　８層に分層される。

遺物　１は１ヶ所に割れて出土し、部分的に黒色処理の痕跡を残す。３・４はいずれも赤褐色を呈し、被熱により器面が荒れている。８は調査終了時の覆土エリア外から出土した。常総型の土師器甕である。12はガラス小玉であり、インクブルー 色(※)を呈する。

所見　カマドの位置から入り口部は南側と想定される。遺物は出土位置と破損状況から住居廃絶期と間をおかず廃棄されたと考えられる。また、1･3･4は被熱したものを廃棄した可能性がある。

１号住居址の時期はカマドが存在することや出土遺物から、古墳時代後期の6世紀後葉から7世紀前葉のものと考えた。しかしながら、現地調査時に本住居址出土遺物として取上げたものの中には複数時期のものが混在して見られた。まず６号住居址１の須恵器であるが本住居址北壁直下の床面近くから出土した。帰属時期としては５世紀後半と考えられ、６号住居址出土として位置付けた。また、本住居址エリア外付近の覆土上層からは、９世紀前葉の須恵器(第20図37･38･40～42)が出土し、遺構が明確に認識できなかったため、遺構外出土遺物として扱った。



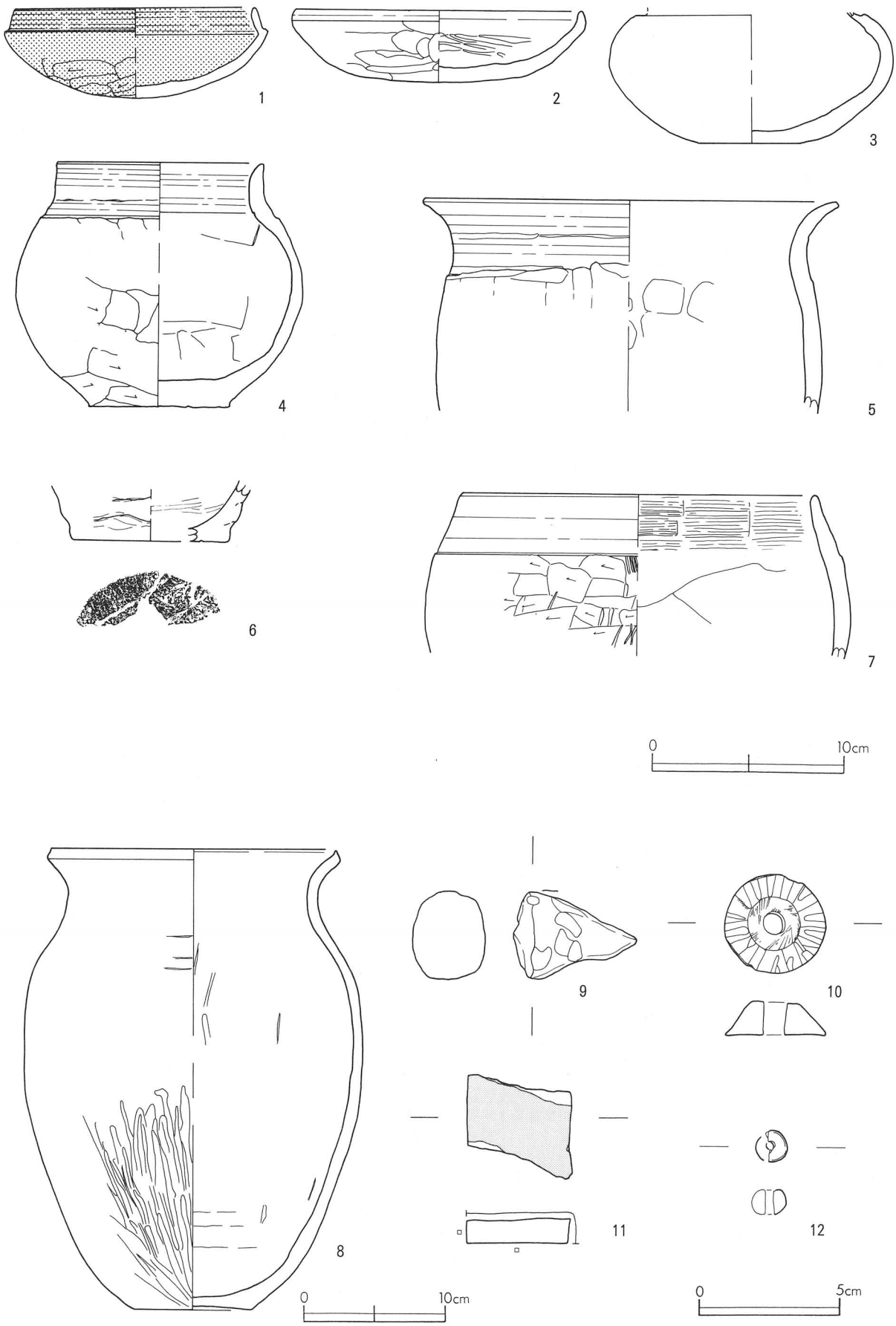
1号住居址

1　暗褐色　表土の一部、粒子細かい、しまり・粘性ややあり
2　暗褐色　1層より黒色味増す、黒色土ブロック若干、しまりややあり、粘性あり
3　褐色　ローム粒多量、焼土粒・炭化粒、しまりややあり、粘性あり
4　褐色　3層より暗い、φ5㎜程の黒褐色土粒、しまりややあり、粘性あり
5　暗褐色　黒色味増す、φ2㎜程のローム粒、炭化物、焼土粒、しまりややあり、粘性あり
6　褐色　4層と同様の色調、φ2㎜程のローム粒多量、焼土粒、ザラザラ、しまり弱、粘性あり
7　――　φ3㎜程のロームブロック、焼土粒多量

第5図　1号住居址

1号住居址出土遺物観察表

図版No.	器形 器種	法量 (cm・g)	残存 出土状況	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
第6図 1	土師器 坏	A: 12.8 C: 4.8	1/3 覆土下位	普通	砂粒多量	にぶい褐	口縁部は短く内傾して立ち上がる。口縁部外面は横ナデ。口縁部と体部の境目に明瞭な稜を持つ。内面に不明瞭な一方向のミガキ。体部外面はヘラ削り。丸底。内外面黒色処理の痕跡あり。	
2	土師器 坏	A: 〔15.2〕 C: 3.8	1/3 覆土	普通	赤色粒多量	にぶい橙	形態は偏平で接地部が平坦。口縁部は短く内傾。口縁部外面は横ナデ。内面に一方向のミガキ。体部外面はヘラ削り。内面は赤彩か。	
3	土師器 短頸壷	B: 6.0 C: (6.9)	1/3 床直	普通	雲母中量	にぶい赤褐	体部が大きく湾曲し、上位に最大径を持つ。頸部に沈線を巡らせ、短い口縁部が立ち上がると思われる。底部は丸みを帯びた平底。器面被熱で荒れ。	
4	土師器 小型甕	A: 〔11.2〕 B: 7.6 C: 13.1	1/5 覆土下位	普通	長石・石英多量	橙	口縁部は直立する。胴部は球形で、底部は平底。口縁部はナデられ、体部から底部・底面がヘラ削り。内面ヘラナデ。器面は被熱し荒れる。	底面に藁状の圧痕
5	土師器 甕	A: 〔22.0〕 C: (11.3)	1/3 覆土下位	普通	雲母少量 胎土級密	明黄褐	口縁部は頸部から強く外反、そして横方向のナデ。胴部と口縁部の境界に稜を持つ。胴部外面ヘラ削り後ナデ。外面に煤付着。	



第６図　１号住居址出土遺物

図版No.	器形 器種	法量 (cm・g)	残存 出土状況	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
6	土師器 甕又は鉢	B: 〔8.2〕 C: (2.8)	一部覆土	普通	石英・長石多量、雲母中量	暗褐	底部から外傾。外面輪積痕明瞭。内面ヘラナデ。底面木葉痕。	
7	土師器 鉢	A:〔19.2〕 C: (8.6)	1／6 床直	普通	石英・長石中量	にぶい黄橙	口縁部内傾。口縁部と胴部の境界に稜を持つ。口縁部内面刷毛目状のナデ。体部横方向のヘラ削り。	
8	土師器 甕	A:〔20.2〕 B: 8.4 C: 33.3	1／3 覆土	普通	石英・長石・雲母多量	橙	頚部は内湾して緩やかに括れ、口唇部をつまみ上げる。胴部上位に最大径を持ち、やや肩が張る。胴部上半ヘラナデ、中位～下半ヘラミガキ。底面はヘラナデ。内面上半ヘラナデ、下半はナデ。	最大径部分にカマド構築材付着
9	土師器 甑把手	――	把手片 覆土	普通	長石・雲母中量	橙	断面楕円形。先端が太身。全体的に磨耗している。	
10	石製品 紡錘車	長: 3.5 幅: 3.6 厚: 1.2 孔径: 0.8 量: (18.3)	ほぼ完形 覆土下位	――	石材：滑石	暗灰	断面形態は扁平な台形。側面に縦方向のミガキや線刻風の細かい線が見られる。上面に線条痕が残る。	
11	石製品 砥石	長: 3.7 幅: 3.8 厚: 0.9 重: 16.2	一部覆土	――	石材：凝灰岩	にぶい黄橙	断面長方形。1面に切り出し痕が残る。砥面2面。	
12	ガラス小玉	長: 1.1 幅: (0.7) 厚: 0.9 孔径:(0.3) 重: (0.7)	1／2 3区 覆土	――	――	インクブルー※	上下に潰れた円形。表面は平滑であるが内部に気泡が多く見られる。やや透明感がある。	

※色名は　財団法人日本色彩研究所「改訂版　色名小事典」1988による。

2号住居址（第7・8図：ＰＬ5・9）

位置　調査区東側Ｆ―3・4グリットに位置する。

規模・形状　長径3.79m、短径3.44mの縦長の方形を呈する。壁は全体にやや外傾して立ち上がるが、南壁はほぼ垂直に、東壁は一部オーバーハングしていた。深さは最深部で50cmを測る。壁溝はカマド両側と西側の中央部を除き、ほぼ全周する。幅は7～32cm、深さは6cmを測る。西側南寄りと南から東側にかけての壁溝内で、円形・楕円形を呈する径7～30cmの小ピットが10ヶ所検出された。深さは3～13cmと浅いものであった。

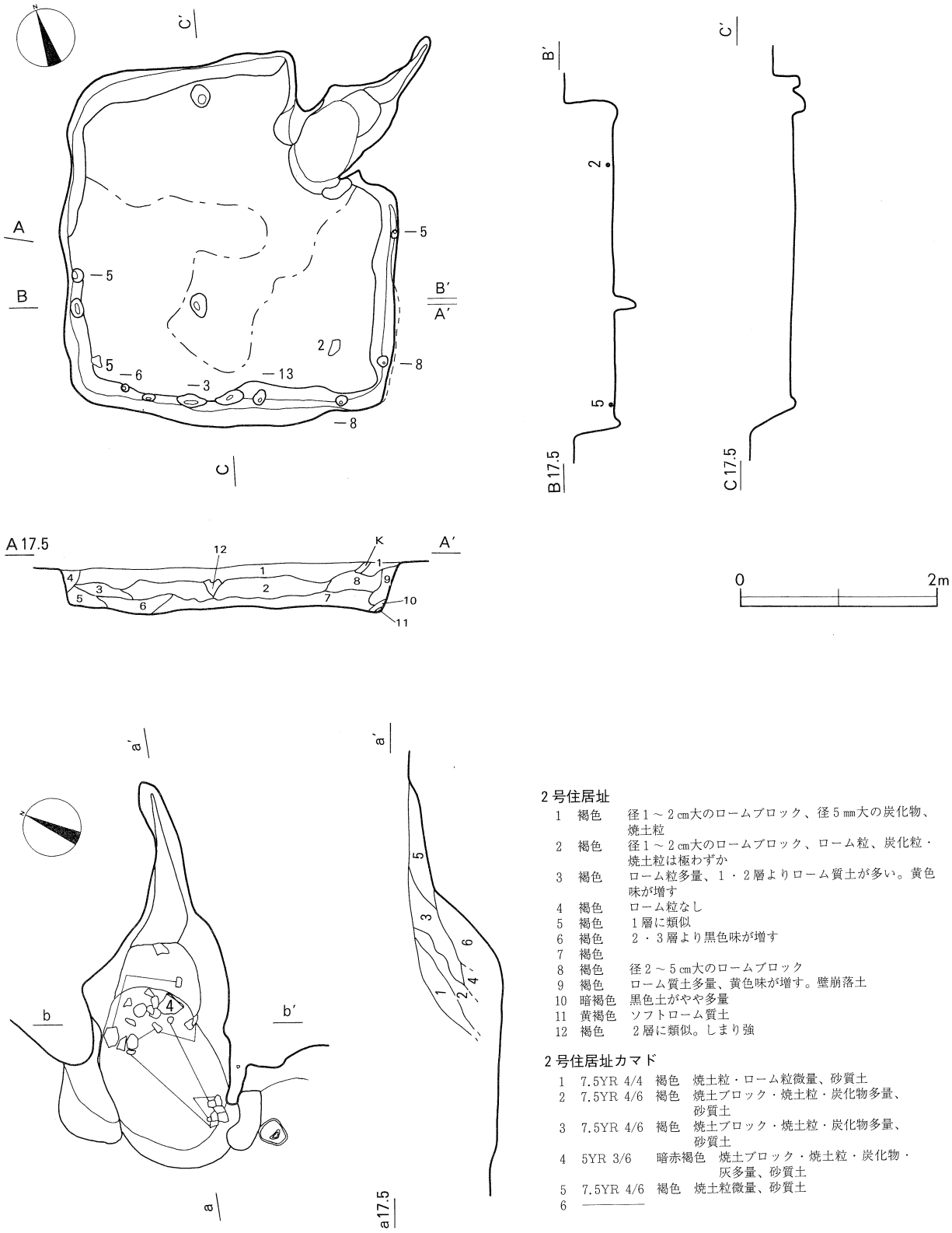
主軸方向　N－15°－E（入り口部を南側と想定して）

床　北側約半面と、南側の中央部にかけて硬化面が広がっていた。床面はほぼ平坦である。

ピット　2ヶ所検出された。ピットは住居址のほぼ中心軸の南北に配置される。平面形はともに楕円形を呈し、長径23～25cm、深さ12～23cmを測る。

カマド　北東隅を大きく掘り込んで構築される。全長1.98m、袖部幅は1.02mを測り、両袖部は被熱により赤化していた。右側袖部は若干崩れている。燃焼部は楕円形を呈し、長径87cm、床面から8cmほど掘り込まれている。煙道部にかけては急激に先細り状を呈している。煙道部は燃焼部からゆるやかに外傾し、一度平坦面を有して短く階段状に立ち上がっている。覆土は6層に分層され、2～4層は焼土・炭化物が多量に混入していた。全体に砂質土が含まれている。遺物は燃焼部奥の覆土中位から下位にかけて破片が出土していた。燃焼部手前より出土する土器と接合するものもある。カマド廃絶後に廃棄されたものであろう。

覆土　12層に分層された。壁際に崩落土が堆積していた。



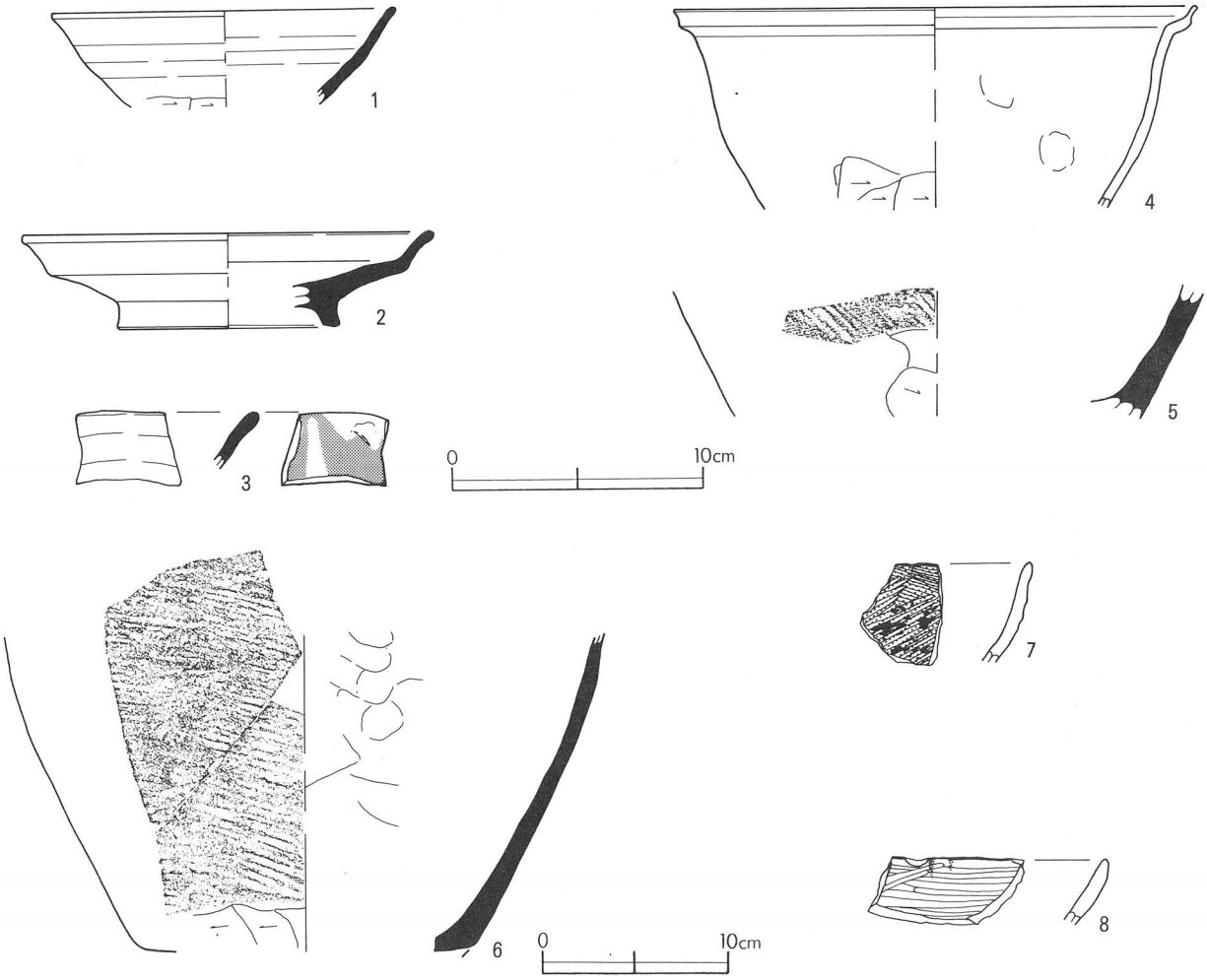
2号住居址

1	褐色	径1～2㎝大のロームブロック、径5㎜大の炭化物、焼土粒
2	褐色	径1～2㎝大のロームブロック、ローム粒、炭化粒・焼土粒は極わずか
3	褐色	ローム粒多量、1・2層よりローム質土が多い。黄色味が増す
4	褐色	ローム粒なし
5	褐色	1層に類似
6	褐色	2・3層より黒色味が増す
7	褐色	
8	褐色	径2～5㎝大のロームブロック
9	褐色	ローム質土多量、黄色味が増す。壁崩落土
10	暗褐色	黒色土がやや多量
11	黄褐色	ソフトローム質土
12	褐色	2層に類似。しまり強

2号住居址カマド

1	7.5YR 4/4	褐色	焼土粒・ローム粒微量、砂質土
2	7.5YR 4/6	褐色	焼土ブロック・焼土粒・炭化物多量、砂質土
3	7.5YR 4/6	褐色	焼土ブロック・焼土粒・炭化物多量、砂質土
4	5YR 3/6	暗赤褐色	焼土ブロック・焼土粒・炭化物・灰多量、砂質土
5	7.5YR 4/6	褐色	焼土粒微量、砂質土
6	――		

第7図　2号住居址



第８図　２号住居址出土遺物

２号住居址出土遺物観察表

図版No.	器形 器種	法量 (cm・g)	残存 出土状況	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
第８図 1	須恵器 坏	A:〔13.8〕 C: (3.8)	1／5 覆土	普通	長石多量、雲母中量	灰	体部外反。底部側縁に手持ちヘラ削り。	
2	須恵器 高台付盤	A:〔16.4〕 C: 3.8 D:〔9.0〕 E: 1.0	1／4 覆土下位	良好	礫・白色針状物質・黒色粒	灰オリーブ	坏部は中位で段を有し、口縁部は外反する。口唇部は丸みを帯びやや膨らむ。高台端部は内削ぎ状。付け高台。内面平滑。	木葉下窯跡群産と考えられる。
3	須恵器 坏	――	破片 カマド覆土	普通	雲母多量	にぶい黄橙	内面にタール状付着物が見られ、燈明用坏片と思われる。	
4	土師器 鉢	A:〔21.0〕 C: (8.3)	1／6 カマド覆土	良好	長石・石英多量	明黄褐	口唇部は短くつまみ上げられ、立ち上がる。体部ナデ、下半ヘラ削り。内面ナデ、指頭痕が見られた。	
5	須恵器 甕又は鉢	C: (4.8)	破片 床直	普通	長石・雲母多量	黄褐	体部斜め方向のタタキ目、下半ヘラ削り。内外面の荒れ著しい。	6と同一
6	須恵器 甕又は鉢	C: (17.0)	1／6 覆土	普通	雲母多量、長石中量	灰	体部斜め方向のタタキ目、下半ヘラ削り。内面ナデ、指頭痕見られる。内外面とも荒れ著しい。	5と同一
7	土師器 坏	――	破片 覆土	普通	石英微量、雲母多量	にぶい褐	内面ヘラミガキ。内面黒色処理、漆の様な付着物が点在。	
8	土師器 坏	――	破片 覆土	良好	石英微量	にぶい橙	口唇部内面にタール状の付着物が見られる。外面削り後ナデ。	

遺物　床面直上より出土している。いずれも破片で出土した。1は須恵器坏、2は須恵器高台付盤である。2の須恵器高台付盤は胎土に白色針状物質や丸い小礫の混入が見られ、新治窯跡群産製品の特徴の一つである雲母や石英・長石などの鉱物は含まれず、木葉下窯跡群産須恵器と考えられる。4は土師器鉢で、口縁部の作りは同時期の甕の口縁部と類似する。5・6は須恵器甕または鉢と考えられる。3・8の坏の口縁部内面には、タール状の付着物が残り、その状況から燈芯を添えた痕跡と読み取れる。7の内面黒色処理された土師器坏の内面には漆状の付着物が点在する。

所見　本住居址のカマドの位置は特徴的といえる。床面の硬化面の状況から、入り口部は南側と想定される。遺物は破損状況から住居廃絶期と間をおかず廃棄されたと思われ、時期は平安時代9世紀前葉から中葉に相当しよう。

3号住居址（第9・10図：ＰＬ5・6・9）

位置　調査区北端Ｄ・Ｅ―2グリットに位置する。

規模・形状　長径3.42m、短径3.2mの横長隅丸方形を呈する。壁はやや外傾して立ち上がり、深さは最深部で55cmを測る。壁溝は南西・南東の各コーナーに巡っており、幅は8～14cm、深さは4cmである。

主軸方向　N－13°－W

床　ほぼ平坦である。カマドの焚き口部手前に硬化面が、また床面東側の南北方向に帯状に白色粘土が広がっていた。

ピット　6ヶ所検出された。平面形は円形を呈し、径11～25cmを測る。深さはいずれも浅く8～14cmであった。

カマド　北壁ほぼ中央に構築され、全長1.26m、袖部幅1.0mを測る。袖部は高さ・厚み共に充分で大型である。上面には白色粘土が一部残存していた。燃焼部はひさご形を呈し、床面から3cmほど掘り込まれている。煙道部は燃焼部からゆるやかに、そして一度段を有した後、ほぼ垂直に立ちあがっている。天井部が一部残存していた。覆土は9層に分層された。遺物は燃焼部下位より出土している。

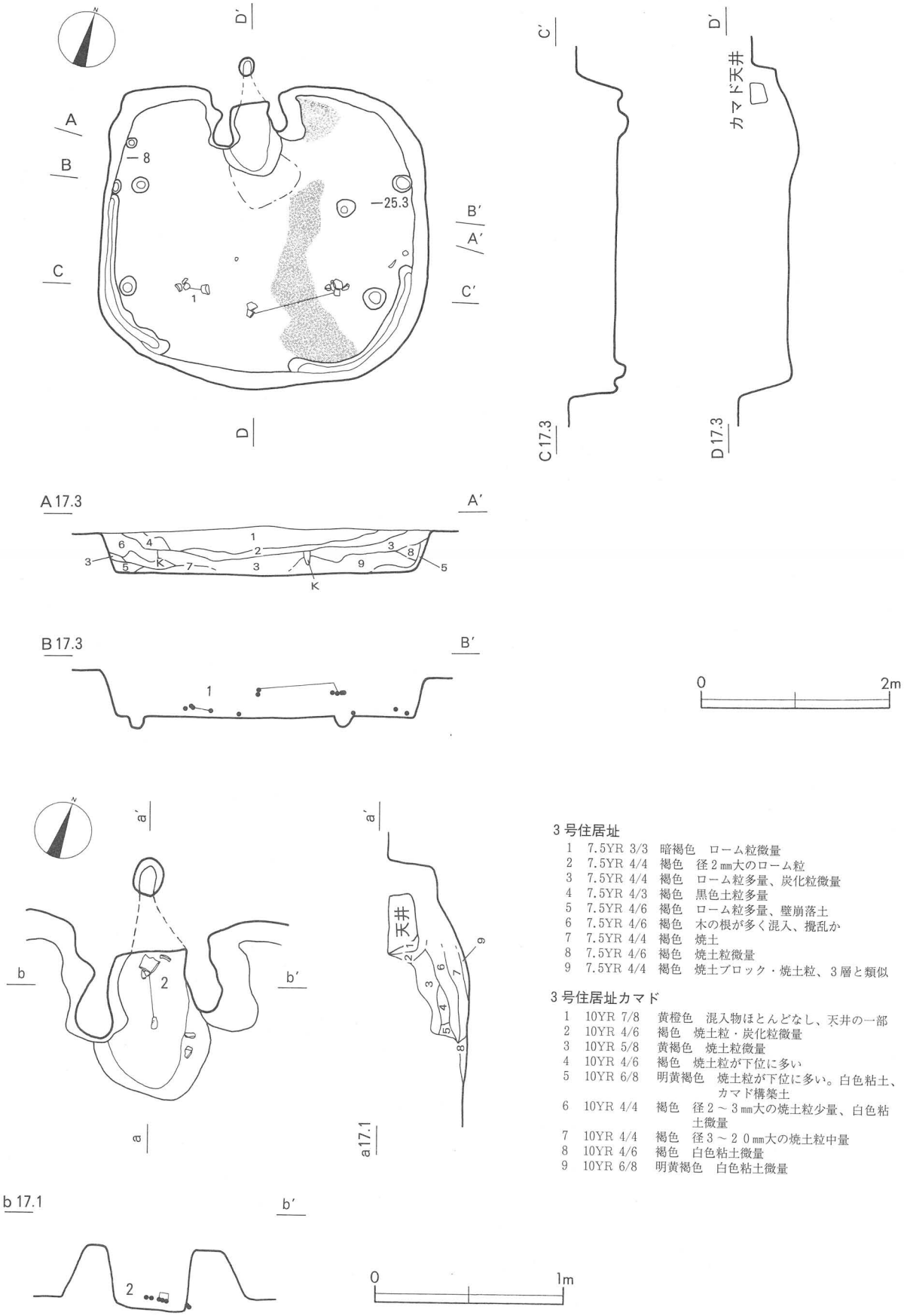
覆土　9層に分層された。

遺物　覆土上位から下位にわたり出土している。いずれも廃棄遺物である。1は須恵器坏で、2は須恵器蓋である。この蓋には焼成時の歪みが見られるが、焼成は良好なものである。3は土師器坏で口唇部内面にタール状の付着物が点在して残る。4は手捏ね土器の底部と考えられる。

所見　カマドの配置から南側が入り口部と想定される。遺物は出土位置と破損状況から住居廃絶期と間をおかず廃棄されたと思われ、時期は平安時代9世紀前葉から中葉に相当しよう。

3号住居址出土遺物観察表

図版No.	器形 器種	法量 (cm・g)	残存 出土状況	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
第10図 1	須恵器 坏	A:〔13.8〕 C:（3.8）	3／4 覆土	普通	長石・石英多量、雲母中量	黒褐	内外面は燻した様に黒い。底部から外反する。底部側縁に手持ちヘラ削り。底面回転ヘラ切り。	
2	須恵器 蓋	A:〔17.0〕 C:（2.0）	1／3 カマド覆土	良好	長石中量	灰オリーブ	端部は鋭角的に折れ曲がる。外面回転ヘラ削り。焼成時のゆがみあり。内面に焼成時の灰付着。	



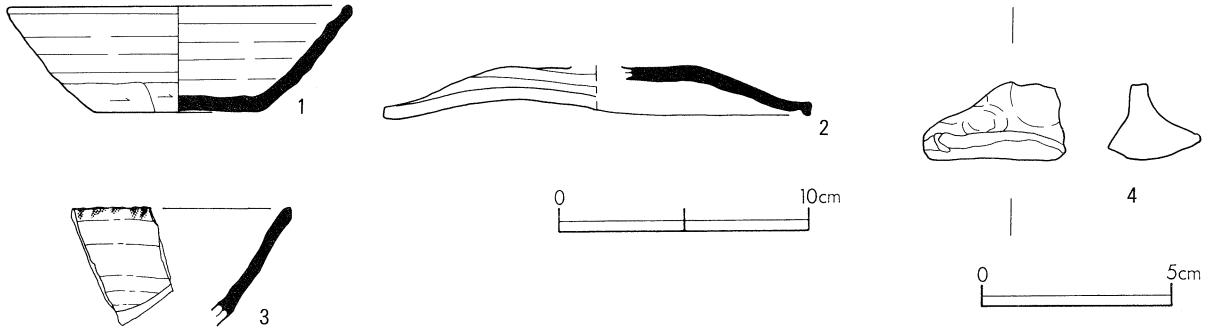
3号住居址

1	7.5YR 3/3	暗褐色	ローム粒微量
2	7.5YR 4/4	褐色	径2㎜大のローム粒
3	7.5YR 4/4	褐色	ローム粒多量、炭化粒微量
4	7.5YR 4/3	褐色	黒色土粒多量
5	7.5YR 4/6	褐色	ローム粒多量、壁崩落土
6	7.5YR 4/6	褐色	木の根が多く混入、攪乱か
7	7.5YR 4/4	褐色	焼土
8	7.5YR 4/6	褐色	焼土粒微量
9	7.5YR 4/4	褐色	焼土ブロック・焼土粒、3層と類似

3号住居址カマド

1	10YR 7/8	黄橙色	混入物ほとんどなし、天井の一部
2	10YR 4/6	褐色	焼土粒・炭化粒微量
3	10YR 5/8	黄褐色	焼土粒微量
4	10YR 4/6	褐色	焼土粒が下位に多い
5	10YR 6/8	明黄褐色	焼土粒が下位に多い。白色粘土、カマド構築土
6	10YR 4/4	褐色	径2～3㎜大の焼土粒少量、白色粘土微量
7	10YR 4/4	褐色	径3～20㎜大の焼土粒中量
8	10YR 4/6	褐色	白色粘土微量
9	10YR 6/8	明黄褐色	白色粘土微量

第9図　3号住居址



第10図　3号住居址出土遺物

図版№	器形器種	法量(cm・g)	残存出土状況	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
3	須恵器坏	――	破片覆土	普通	石英・長石中量、雲母多量	にぶい赤褐	口唇部内面にタール状の付着物が見られる。色調は土師器同様であるが、作りは須恵器。底部側縁ヘラ削り。	
4	手捏ね土器	――	破片覆土	普通	雲母中量	明黄褐	端部は細くつまみ出される。上面には指頭痕が見られる。	

4号住居址（第11～14図：ＰＬ６・10～12・16）

位置　調査区西側Ａ・Ｂ―４・５グリットに位置する。東側半分程5号住居址と重複しており、覆土の観察から本址が新しいと判明している。

規模・形状　長径3.75m、短径3.71mのほぼ正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは最深部で25cmを測る。壁溝は北西隅の一部に巡っており、幅は11～14cmである。

主軸方向　Ｎ－３°－Ｅ

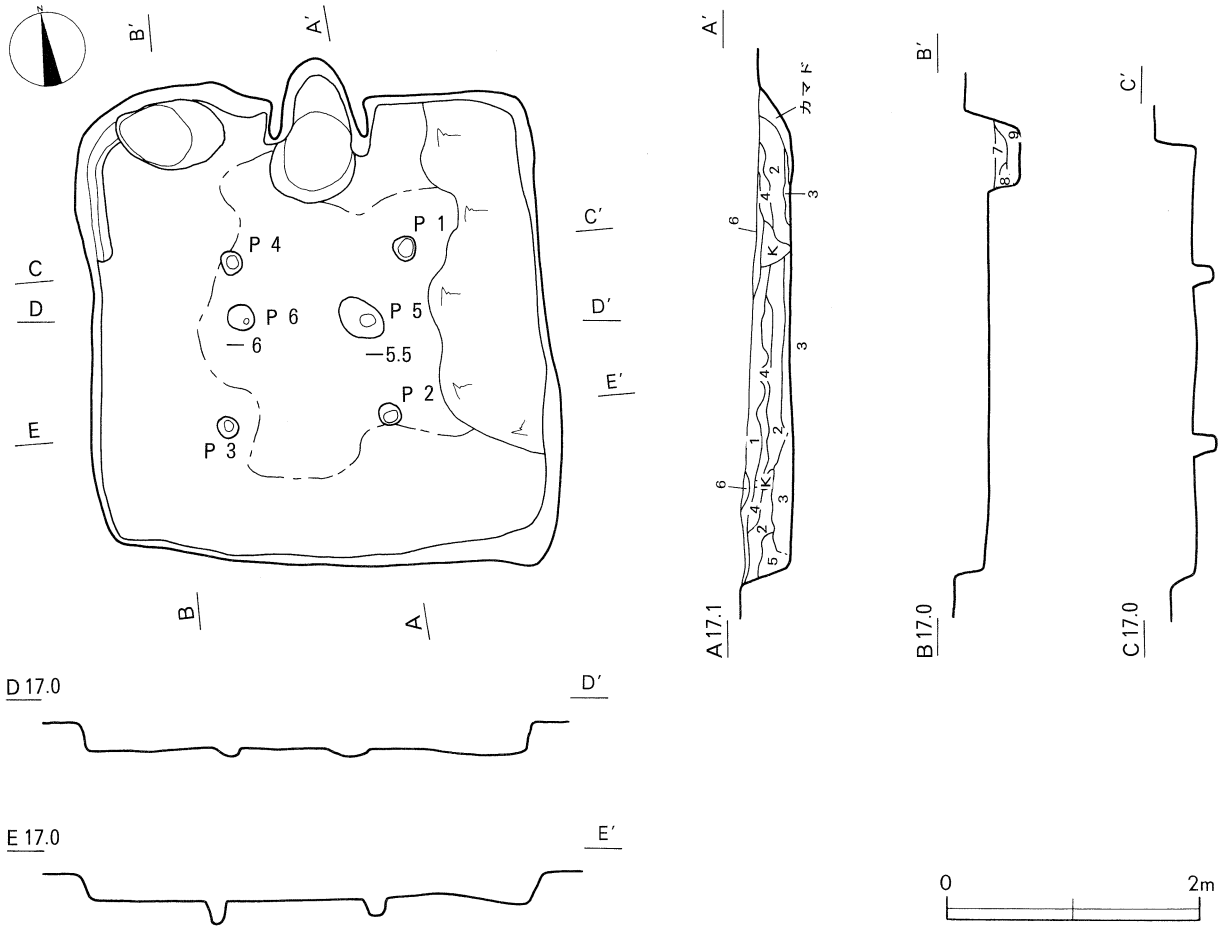
床　ほぼ平坦である。床面東側は壁に向かい若干低くなっている箇所がある。ピットの内側からカマドにかけて硬化面が広がっている。

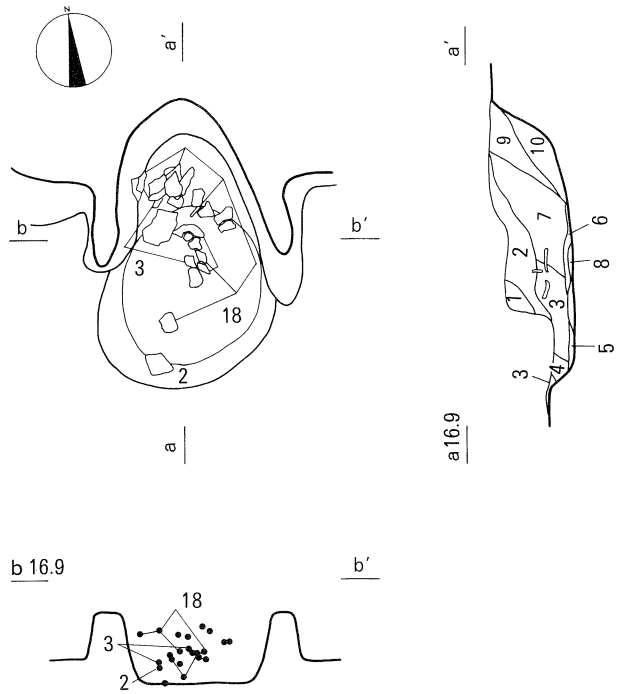
ピット　７ヶ所検出された。カマド西側の楕円形ピットは配置と規模から貯蔵穴と思われる。長径86cm、深さ24cmを測り、断面形はバケツ状を呈する。Ｐ１～Ｐ６は、住居址中央に整然と配置しており柱穴と考えられるが、Ｐ１～Ｐ４とＰ５・Ｐ６は平面形や深さにおいて違いが見られる。Ｐ１～Ｐ４の深さは15cmを越え、Ｐ５・Ｐ６は6cm前後である。平面形は前者より後者が大きく、楕円形を呈する。

カマド　北壁ほぼ中央部を掘り込んで構築され、全長1.15m、袖部幅84cmを測る。燃焼部は楕円形を呈し、長径74cm、床面から10cm程掘り込まれていた。煙道部は燃焼部からゆるやかに外傾して立ち上がる。覆土は10層に分層され、７層は天井崩落土と思われる。遺物は煙道部から燃焼部にかけての覆土上位から下位で出土しており、廃棄遺物と思われる。

覆土　９層に分層された。貯蔵穴内から炭化物・焼土粒が出土している。

遺物　貯蔵穴覆土内や住居址覆土中位から下位にわたり出土している。いずれも廃棄遺物であろう。須恵器の出土は少なく、土師器と少数の灰釉陶器片が出土している。１～9は土師器坏で、4・6・7～９は内面黒色処理されたものである。４・６の口唇部にはタール状の付着物が見られる。９の底部近くには、墨書が見られるが判読できない。11～13は土師器高台付坏で、11・13が内面黒色処理されている。11の底面には外側からの力により穿孔され、意図的なものと思われる。14・15は高台付皿であ





4号住居址

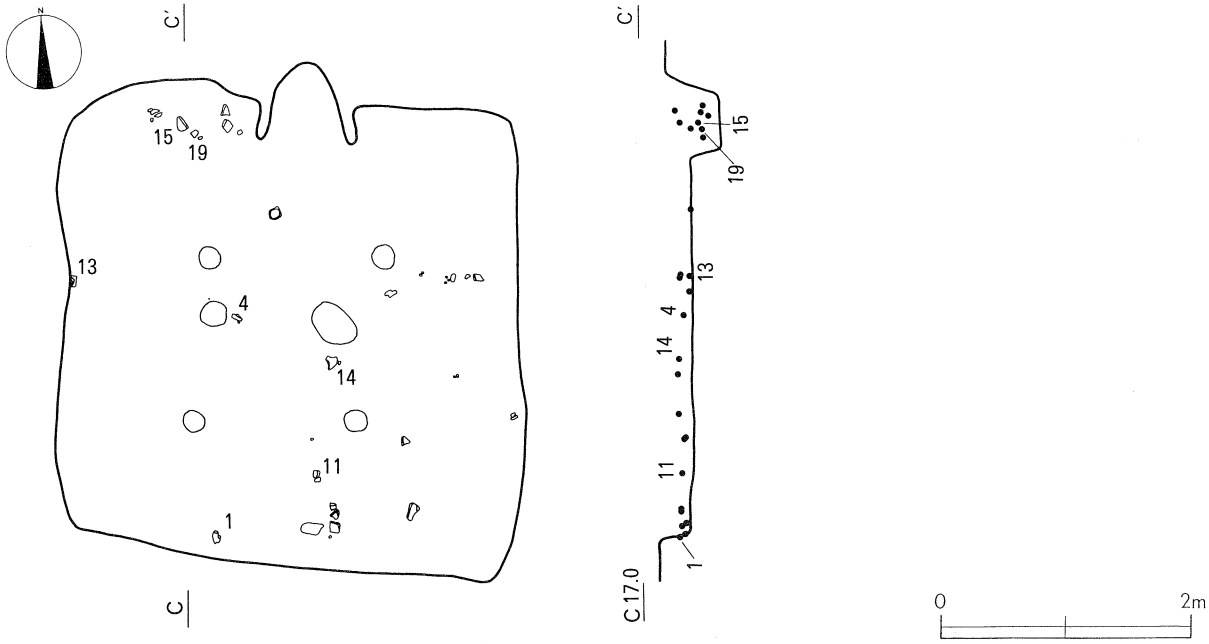
1	7.5YR 4／3	褐色	ローム粒・焼土粒・黒色土粒
2	7.5YR 4／4	褐色	ローム粒・黒色土粒中量、焼土ブロック微量
3	7.5YR 4／4	褐色	2層に類似
4	7.5YR 4／4	褐色	黒色土粒多量、2層に類似
5	7.5YR 4／4	褐色	径5㎜大の炭化物中量、焼土粒・ローム粒・ロームブロック
6	――――		
7	7.5YR 3／3	暗褐色	径1～10㎜大の炭化物多量、径1～5㎜大の焼土粒
8	7.5YR 4／6	褐色	
9	7.5YR 4／6	褐色	ローム粒多量、炭化物・焼土粒微量

4号住居址カマド

1	7.5YR 4／6	褐色	住居址覆土
2	7.5YR 4／6	褐色	焼土ブロック・砂質粘土
3	7.5YR 3／3	暗褐色	焼土粒・炭化物多量、焼土ブロック微量
4	7.5YR 4／6	褐色	2層に類似
5	7.5YR 4／4	褐色	径1㎝大の焼土ブロック・炭化物多量、カマド炉床部
6	5YR 3／4	暗赤褐色	焼土粒多量、砂質、カマド炉床部
7	5YR 3／6	暗赤褐色	焼土粒・焼土ブロック多量、天井崩落土か
8	――――		
9	7.5YR 4／3	褐色	焼土粒・ロームブロック少量
10	7.5YR 4／4	褐色	焼土粒・ロームブロック少量

0　1m

第11図　4号住居址



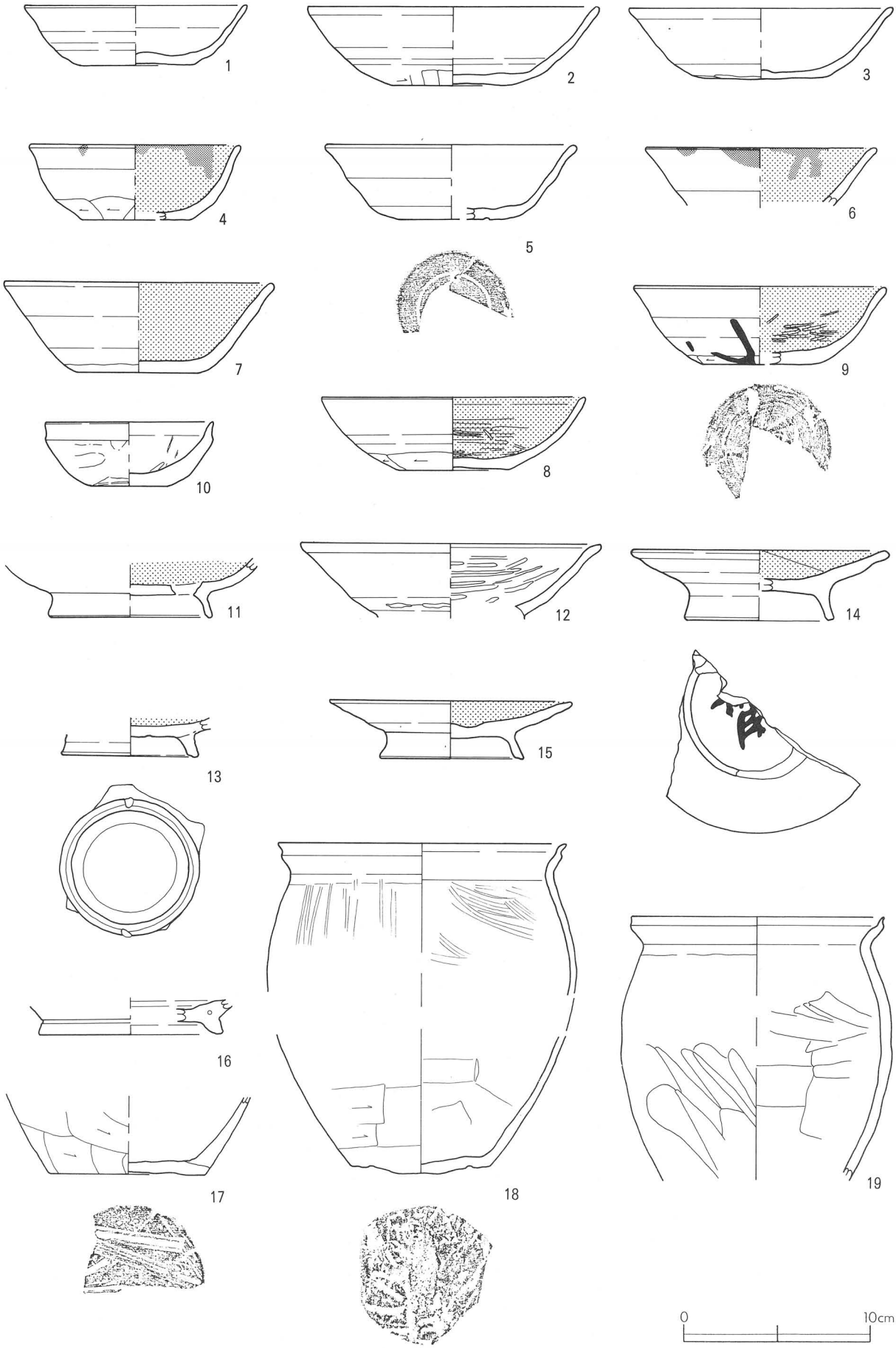
第12図　4号住居址遺物出土状況

り、いずれも内面黒色処理されている。14の底面には2文字の墨書がなされるが、判読できない。16は灰釉陶器の長頸瓶と考えられる高台が付いた底部である。17～19はいずれも小型の土師器甕である。20･21は土師器坏と考えられる口唇部に、タール状の付着物が見られる破片である。22は須恵器鉄鉢形土器の胴部片と考えられる。23は外面同心円叩き目の鉢底部付近の破片を転用した砥石であり、割れ面に磨られた痕跡が残る。24は砥石である。25･26は不明鉄製品である。

所見　カマドの配置から入り口部は南側と想定される。住居址内で確認された柱穴は形態的に2種類に区別され、Ｐ１～Ｐ４は方形に配置され主柱穴と考えられる。またＰ５･Ｐ６は特徴的な配置と深さが浅い点から補助柱穴的機能を持つものと考えられる。遺物は出土位置と破損状況から住居廃絶期と間をおかず廃棄されたと思われ、時期は平安時代9世紀後葉に相当しよう。

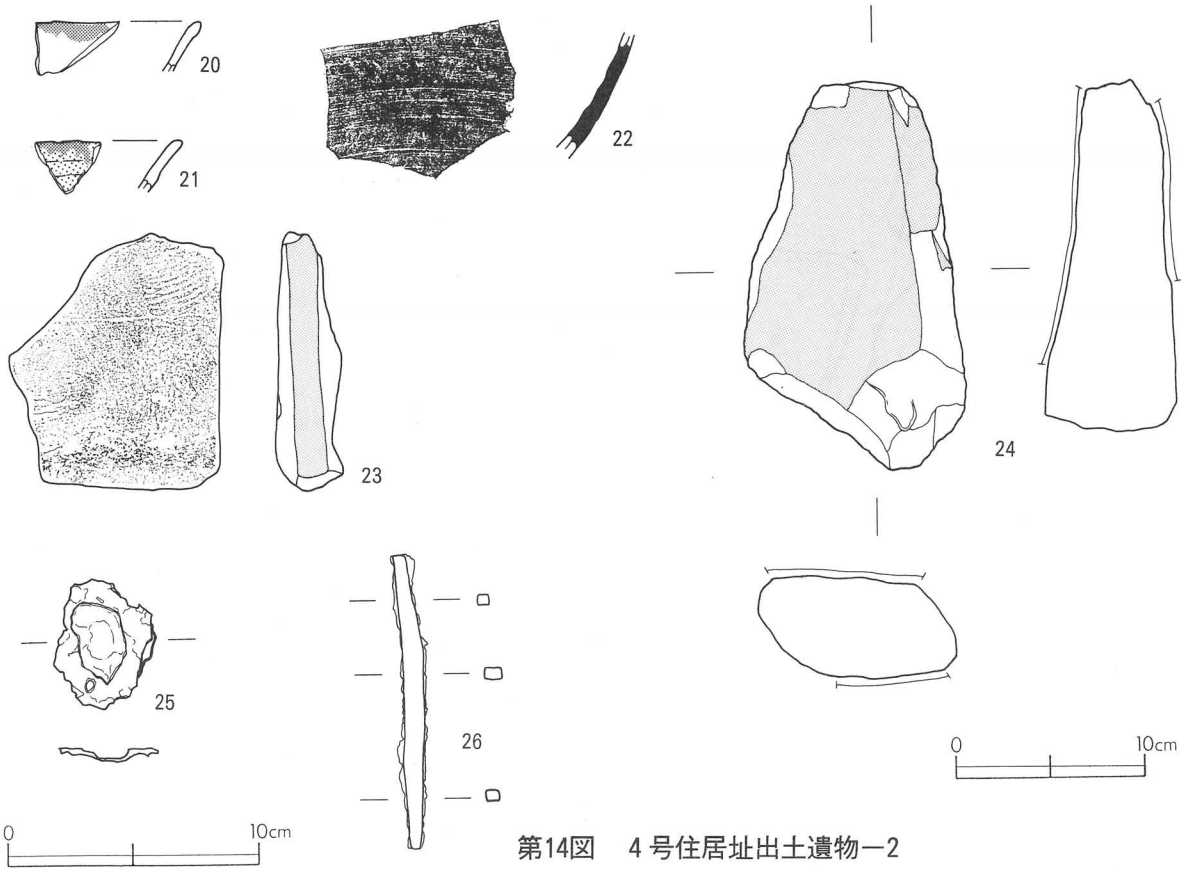
４号住居址出土遺物観察表

図版No.	器形 器種	法量 (cm･g)	残存 出土状況	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
第13図 1	土師器 坏	A:〔12.1〕 B:〔5.1〕 C: 3.2	1／2 覆土下位	普通	雲母多量、石英中量	明黄褐	底部から外傾。回転ナデ。底面は回転ヘラ切り後、その上をナデ。底部側縁はやや張り出す。底部は若干上底状。底面･内面に煤付着。	
2	土師器 坏	A:〔15.6〕 B: 6.4 C: 4.2	1／4 カマド覆土	普通	長石･石英中量、雲母多量	橙	体部外反。回転ナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底面一方向のヘラ削り(直線的)。若干上底状。	
3	土師器 坏	A:〔14.2〕 B:〔7.0〕 C: 3.8	1／2 カマド覆土	良好	長石・石英微量	黄橙	口唇部外反。体部外傾、回転ナデ。体部に輪積痕あり。体部下端回転ヘラ削り。底面回転ヘラ削り(同心円状)。	口唇部に砂質粘土付着。
4	土師器 坏	A:〔11.2〕 B:〔6.0〕 C: 4.0	1／4 覆土	良好	長石・石英多量	明黄褐	体部内湾、口唇部外反。回転ナデ。体部下端手持ちヘラ削り、ナデとの境に稜を残す。底面一方向のヘラ削り(直線的)。口唇部内外面にタール状付着物あり。内面黒色処理。	
5	土師器 坏	A:〔13.4〕 B: 5.6 C: 4.0	1／3 床直	普通	雲母微量	橙	体部外傾、口唇部外反。回転ナデ。体部下端はヘラ削り後ナデ。底面は回転ヘラ削り。	
6	土師器 坏	A:〔12.4〕 C:（3.1）	1／5 覆土下位	普通	長石・石英微量	にぶい褐	体部外傾。回転ナデ。口唇部内外面にタール状付着物あり。内面黒色処理。	



第13図　4号住居址出土遺物－1

図版No.	器形器種	法量(cm・g)	残存出土状況	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
7	土師器坏	A:〔14.4〕 B:〔6.8〕 C: 4.9	1／5覆土	普通	白色粒多量	橙	体部外傾。回転ナデ。底部直上ヘラ削り。内面横方向の丁寧なヘラミガキ。底面一方向のヘラ削り（直線的)。内面黒色処理。	
8	土師器坏	A: 14.2 B: 6.0 C: 3.9	2／3床直	普通	長石中量、雲母多量	にぶい黄橙	体部内湾、回転ナデ。体部下端手持ちヘラ削り。口唇部内面若干すれ。内面ヘラミガキが著しい。底面一方向のヘラ削り(直線的)。内面黒色処理。	
9	土師器坏	A:〔13.8〕 B:〔6.4〕 C: 4.1	1／3覆土	普通	石英・雲母多量	にぶい黄橙	体部内湾、口唇部外反。回転ナデ、内面ヘラミガキ。体部下端回転ヘラ削り。底面回転ヘラ削り(同心円状)。内面黒色処理。	墨書は判読不明。
10	土師器坏	A:〔9.2〕 B:〔4.4〕 C: 3.4	1／6覆土	普通	石英中量	にぶい黄橙	口唇部先細り、稜を有し、刷毛状工具によるナデ。全体は手捏ね成形か。外面ナデ、内面ヘラナデ。底面に目の細かい圧痕あり。	内面に黒色の付着物点在。
11	土師器高台付坏	C: (2.8) D: 8.8 E: 1.2	1／4覆土	普通	白色粒多量、雲母中量	橙	体部湾曲。回転ナデ。高台は「ハ」の字状、付け高台。底面は回転ヘラ削りか。底面に焼成後の穿孔1孔、外側より。内面黒色処理。	
12	土師器高台付坏	A:〔16.2〕 C: 3.9	1／3覆土	良好	石英・雲母・赤色粒微量	にぶい橙	体部外傾、口縁部外反。回転ナデ、体部下端は回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ後ナデ。本来は内面黒色処理か。	内面被熱。
13	土師器高台付坏	C: (2.1) D: 7.5 E: 1.2	底部のみ床面近く	良好	白色粒中量、赤色粒微量	橙	内面ヘラミガキが著しい。内面黒色処理。高台は「ハ」の字状、付け高台。高台接地面に沈線がめぐり、1本棒の圧痕あり。坏部底面は回転ヘラ削り。	
14	土師器高台付皿	A:〔13.8〕 C: 3.8 D: (8.0) E: 1.4	1／3覆土下位	良好	白色粒中量	黄橙	体部は直線的に開く。高台は「ハ」の字状。回転ナデ、内面ヘラミガキが著しい。内面黒色処理。坏部底面は回転ヘラ削りされ、同所に墨書二文字か。	墨書は判読不明。
15	土師器高台付皿	A: 13.0 C: 3.1 D: 7.8 E: 1.1	3／4貯蔵穴覆土	良好	長石・雲母中量	にぶい橙	体部は直線的に開く。高台は「ハ」の字状、回転ナデ。内面黒色処理。坏部底面は回転ヘラ削りされる。高台接地面に沈線がめぐる。坏部と高台部の境には粘土を貼り付けている。	外面煤付着。
16	灰釉陶器長頸瓶	C: (1.5) D:〔9.8〕 E: 0.8	破片覆土	良好	黒色粒少量	灰白	回転ナデ。付け高台。高台部外面にオリーブ灰色の釉が見られる。内面に釉が点在する。底面回転糸切り後ナデ。	
17	土師器小型甕	B: 8.4 C: 4.2	破片覆土	良好	石英・雲母中量、赤色粒	灰褐	底部直上横方向のヘラ削り。底面に植物質茎の痕跡。内面ナデ。	
18	土師器小型甕	A:〔13.8〕 B:〔6.4〕 C: 4.1	1／4カマド覆土	良好	長石・石英中量	黄褐	薄手。口唇部は外反、口縁部に稜を有する。体部上半に最大径を持ち、外面縦方向の刷毛目状の痕跡あり。体部下半ヘラ削り。内面頸部下刷毛目、下半ヘラナデ。全体に被熱している。	底面に木葉痕。
19	土師器甕	A:〔13.4〕 C:〔14.1〕	1／3貯蔵穴覆土	良好	長石・雲母中量、石英多量	明黄褐	口唇部短く立ち上がり、頸部強く屈曲。口縁部ナデ。体部は緩く膨らむ。体部全体をヘラ削りした後、下半部をヘラミガキ。内面ヘラナデ。	
20	土師器坏	――	破片覆土	普通	石英・長石微量	にぶい橙	口唇部の内外面にタール状の付着物あり。	6と同一個体。
21	須恵器坏	――	破片覆土	良好	長石・雲母中量	褐灰	口唇部の内外面にタール状の付着物あり。	
22	須恵器鉄鉢形土器	――	破片覆土	普通	雲母多量、石英微量	黒	鉄鉢形土器の体部破片と思われ、器面に横方向の刷毛目状痕跡、内面も同様。	
23	須恵器転用砥石	長: 10.2 幅: 8.6 重: 137.4	破片覆土	良好	長石多量	にぶい黄橙	断面と表面の一部を砥面とする。表面の砥面以外に同心円状のタタキ目残る。外面と断面の窪みなどには、錆が付着、鉄製品を研いだ痕跡と考えられる。	
24	石製品砥石	長: 20.6 幅: 11.8 厚: 7.1 重: 2200	―― 覆土下位	――	石材:雲母片岩	――	砥面3面。片側は皿状に凹んでいる。	



第14図　4号住居址出土遺物ー2

図版 No.	器形 器種	法量 (cm・g)	残存 出土状況	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
25	鉄製品	長: 5.2 幅: 4.0 厚: 2.0 重: 7.6	——— 覆土	———	———	———	薄い板状でやや湾曲する。	
26	鉄製品	長: 11.6 幅: 4.0 厚: 6.0 重: 13.1	——— 覆土	———	———	———	角棒状で一部曲がる。断面は長方形。	

5号住居址（第15～17図：ＰＬ７・12・13）

位置　Ｂ～Ｄ—３～５グリットに位置する。西側で４号住居址と重複しており、覆土の観察から本址が古いと判明した。また、北東隅の壁は撹乱により壊されていた。

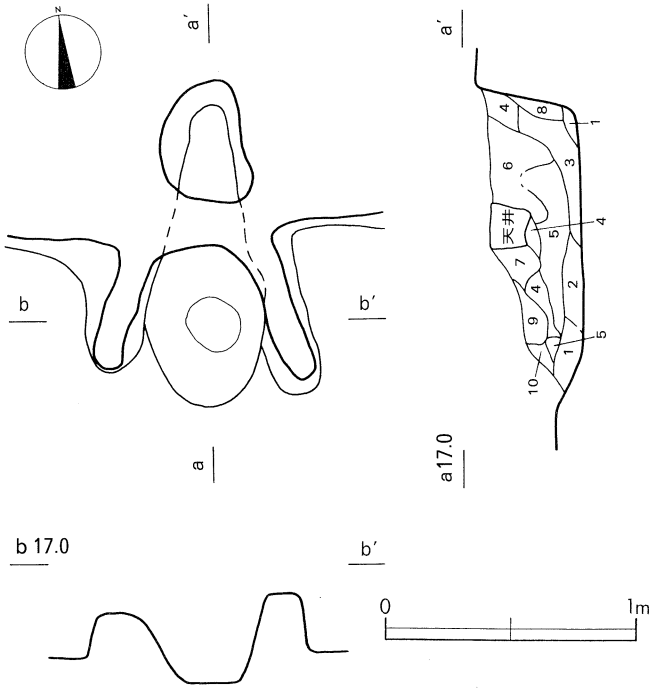
規模・形状　長径7.75m、短径7.65mのほぼ正方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは最深部で50cmを測る。壁溝はカマド西側と南東側から東側にかけて巡っていた。幅は５～15cm、深さ７cmである。

主軸方向　Ｎ－１°－Ｅ

床　ほぼ平坦である。

ピット　６ヶ所検出された。配置と深さから、方形に配置されたＰ１～Ｐ４を主柱穴と考えた。平面形は円形・楕円形を呈し、径23～56cm、深さは38～68cmを測る。カマドの対極に位置するＰ５は入り口部ピットと思われる。Ｐ６は不明ピットである。

カマド　北壁ほぼ中央に構築され、全長1.31m、袖部幅88cmを測る。袖部内側は被熱により著しく赤



5号住居址カマド

1　5YR 3/2　極暗赤褐色　径2cm大の焼土ブロック・焼土粒多量、炭化物・ローム粒
2　5YR 3/3　暗赤褐色　径2cm大の焼土ブロック・焼土粒、黒色土粒・ローム粒
3　7.5YR 4/6　褐色　焼土粒・黒色土粒
4　5YR 3/6　暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒多量
5　5YR 3/4　暗赤褐色　焼土粒・黒色土粒
6　7.5YR 4/6　褐色　3層と類似
7　7.5YR 4/6　褐色　焼土粒・焼土ブロック・砂粒多量
8　5YR 3/6　暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒多量
9　カマド構築土
10　――――

第15図　5号住居址カマド

化していた。燃焼部は楕円形を呈し床面から12cm掘り込まれている。煙道部はやや直立気味に外反して立ち上がっている。天井部の一部が残存していた。覆土は10層に分層された。カマド内から7･8の土製品が出土した。

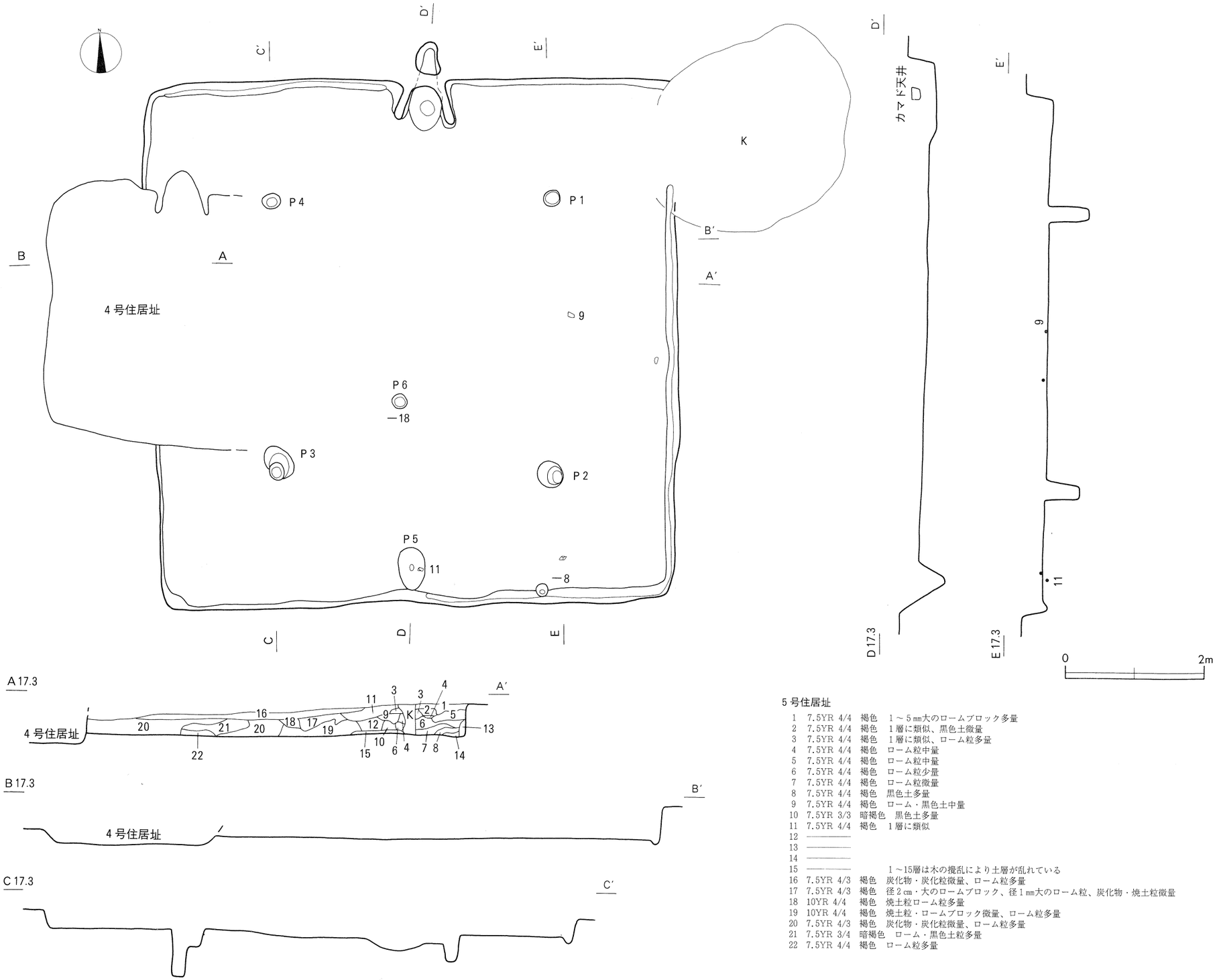
覆土　22層に分層された。住居址北東隅は撹乱により大きく壊されている。

遺物　覆土下位より出土しており、いずれも廃棄遺物である。1～5は土師器坏であり、小振りで内面に放射状のミガキが施されている。3･5以外はいずれも全体が黒色処理されている。6はカマドの土製支脚破片である。7･8は土製品で、7は耳環の形態を模倣したものと考えられ、8は切子玉などの玉類を模倣したものと考えられる。いずれもカマド火床部から出土した。9は上端部が穿孔された砥石である。10は砥石破片である。11は自然界で鉄分が集中してできた中空の褐鉄鉱であろう。

所見　カマドの配置から入り口部は南側と想定される。遺構内出土遺物は出土位置と破損状況から住居廃絶期と間をおかず廃棄されたと思われる。この中で、カマド内から出土した7・8の土製品の出土状況は特徴的といえる。本住居址の時期は出土遺物から古墳時代後期6世紀後半に相当しよう。

5号住居址出土遺物観察表

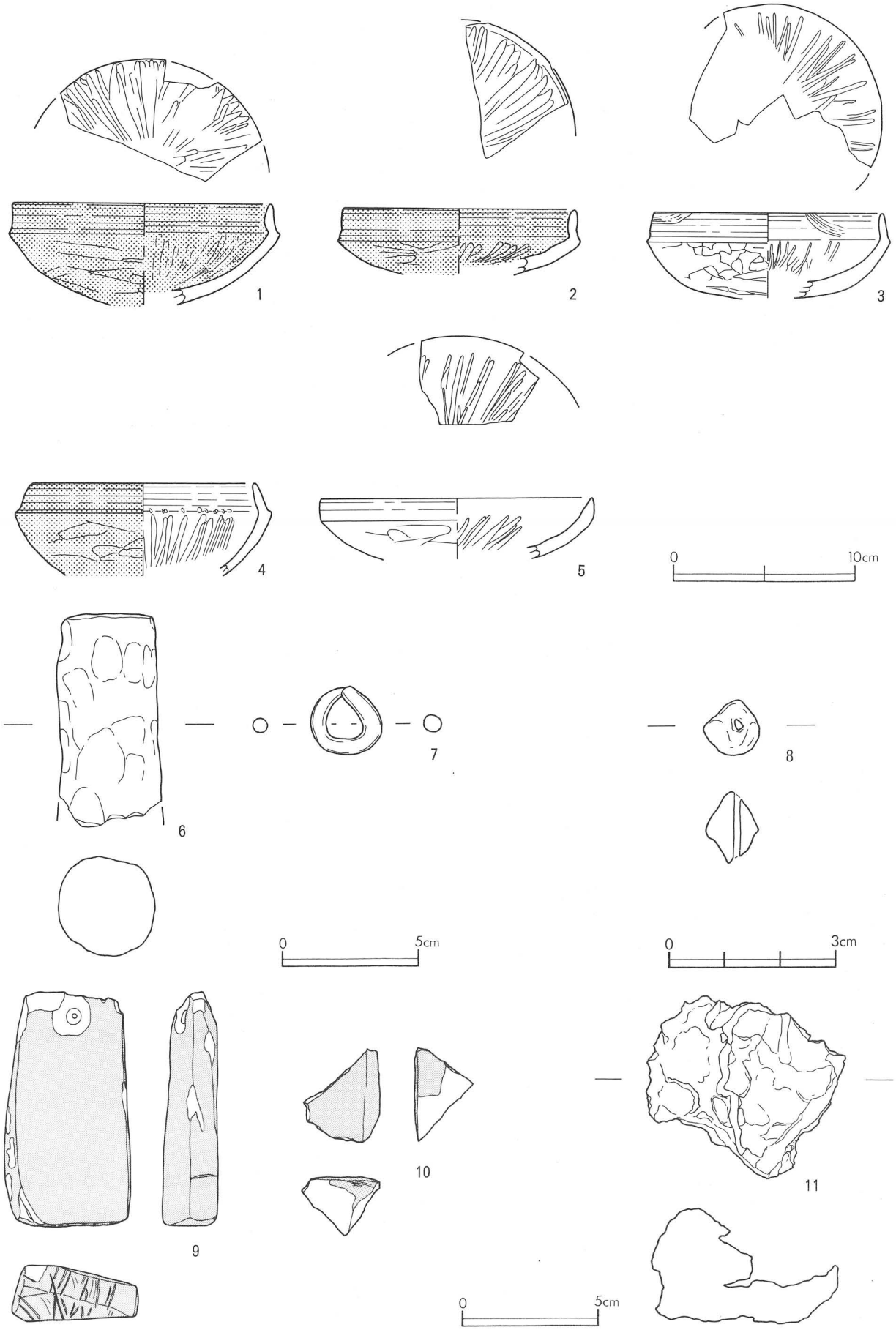
図版No.	器形 器種	法量 (cm・g)	残存 出土状況	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
第17図 1	土師器 坏	A:〔13.8〕 C:（5.5）	1/3 覆土	普通	雲母中量、赤色粒	黒褐	口縁部直立、稜を有し体部は丸みを帯び、丸底。口縁部内外面横ナデ、体部ヘラ削り後ナデ、内面幅広の放射状ミガキ。内外面黒色処理。	
2	土師器 坏	A:〔12.6〕 C:（3.5）	1/5 覆土	普通	雲母中量、赤色粒	黒褐	口縁部直立、稜を有し体部は直線的、浅い丸底。口縁部内外面は横ナデ、体部はヘラ削り後ナデ。内面幅広の放射状ミガキ。内外面黒色処理。	
3	土師器 坏	A:〔13.8〕 C:（4.6）	1/3 覆土	普通	雲母中量、赤色粒	橙で部分的に黒褐	口縁部内傾気味に直立、稜を有し、体部は丸みを帯びる。丸底。口縁部内外面は横ナデ。体部はヘラ削り後ナデ。内面細い放射状ミガキ。	



5号住居址

1	7.5YR 4/4	褐色	1～5㎜大のロームブロック多量
2	7.5YR 4/4	褐色	1層に類似、黒色土微量
3	7.5YR 4/4	褐色	1層に類似、ローム粒多量
4	7.5YR 4/4	褐色	ローム粒中量
5	7.5YR 4/4	褐色	ローム粒中量
6	7.5YR 4/4	褐色	ローム粒少量
7	7.5YR 4/4	褐色	ローム粒微量
8	7.5YR 4/4	褐色	黒色土多量
9	7.5YR 4/4	褐色	ローム・黒色土中量
10	7.5YR 3/3	暗褐色	黒色土多量
11	7.5YR 4/4	褐色	1層に類似
12	―――		
13	―――		
14	―――		
15	―――		1～15層は木の攪乱により土層が乱れている
16	7.5YR 4/3	褐色	炭化物・炭化粒微量、ローム粒多量
17	7.5YR 4/3	褐色	径2㎝・大のロームブロック、径1㎜大のローム粒、炭化物・焼土粒微量
18	10YR 4/4	褐色	焼土粒ローム粒多量
19	10YR 4/4	褐色	焼土粒・ロームブロック微量、ローム粒多量
20	7.5YR 4/3	褐色	炭化物・炭化粒微量、ローム粒多量
21	7.5YR 3/4	暗褐色	ローム・黒色土粒多量
22	7.5YR 4/4	褐色	ローム粒多量

第16図　5号住居址



第17図　5号住居址出土遺物

図版No.	器形 器種	法量 (cm・g)	残存 出土状況	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
4	土師器 坏	A:〔12.6〕 C: (4.6)	1／5 覆土	普通	長石微量、赤色粒	黒褐	口縁部内傾、稜を有し、体部は直線的。丸底。口縁部内外面は横ナデ、体部はヘラ削り後ナデ。内面には放射状のミガキ。外面黒色処理。	
5	土師器 坏	A:〔12.4〕 C: (5.0)	1／6 覆土	普通	長石少量、赤色粒多量	にぶい橙	口縁部外傾気味に直立。稜は丸みを帯び、浅い体部へ続く。丸底。口縁部横ナデ、体部ヘラ削り後ナデ。内面に放射状のミガキあり。	
6	土製品 支脚	長: (7.7) 幅: (3.8) 厚: (3.6) 重:(109.7)	1／3 覆土	良好	長石中量、赤色粒	黄褐	円柱状で、上端は平坦面を持つ。手捏ね、全面に指頭痕が残る。表面にカマド構築材が付着。	
7	環状 土製品	長: 2.6 幅: 2.7 厚: 0.6 重: 2.5	完形 カマド 覆土	良好	長石・雲母少量	橙	細い棒状の粘土紐の両端を接合したもので、接合部はナデ消しておらず、明瞭に残る。雑なつくりである。金属製耳環を模して作られたものか。	
8	管状 土製品	長: 1.3 幅: 1.0 厚: 1.0 重: 0.8	完形 カマド 覆土	普通	長石・雲母少量	橙	細長い紡錘状の中心を孔が貫通する。切子玉又は棗玉を模して作られたものか。雑なつくりである。	
9	石製品 砥石	長: 8.5 幅: 4.6 厚: 2.0 重: 123.0	ほぼ完形 床直	——	石材:凝灰岩	灰黄	上端部1ヶ所に穿孔、両側より穿孔されている。砥面5面、下端部に刃傷あり。形状は長方形で若干ねじれている。	
10	石製品 砥石	長: 3.4 幅: 2.3 厚: 2.1 重: 10.9	破片 覆土	——	石材:凝灰岩	灰黄	砥面3面、上面は稜を有する。	被熱による赤化。
11	中空 褐鉄鉱	長: 6.6 幅: 7.2 厚: 4.2 重: 10.9	—— 入り口 ピット 覆土	——	——	——	形状は楕円形で、内部は中空。自然界での鉄分集中によるもの。内面は平滑で、外面には砂が付着し固まっている。	

6号住居址（第18図：ＰＬ４・13）

位置　E・F—５グリットに位置している。大部分は1号住居址と重複しており、覆土の観察から本址が古いと判断した。

規模・形状　1号住居址との重複、撹乱により北壁から北東コーナーの壁が壊されている。そして床面の一部だけが検出された。１辺およそ３ｍの小型で方形を呈するものと思われる。残存する壁は外傾して立ち上がる。床面の最深部は46cmを測るが、１号住居址よりは浅い。

主軸方向　ほぼ南北または東西方向か。

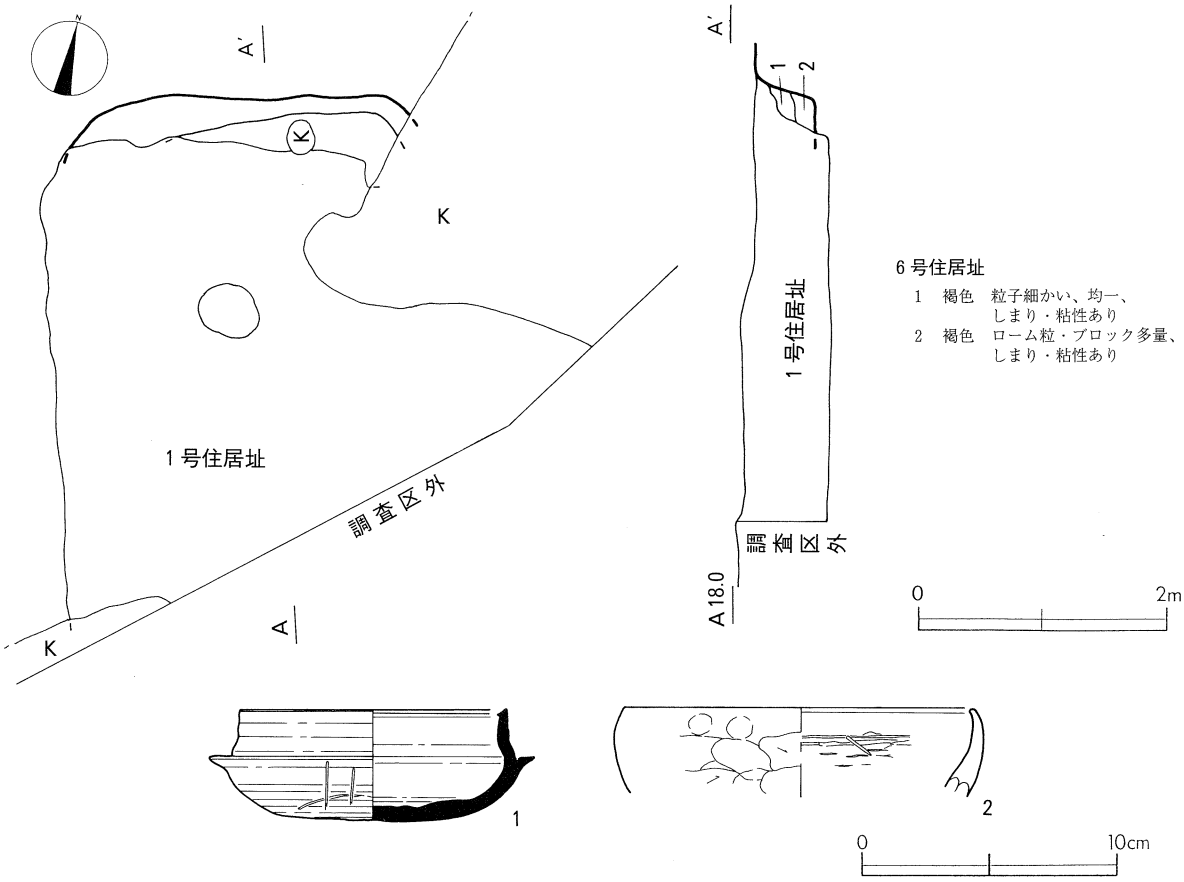
床　ほぼ平坦であり硬化面は確認されない。大半は1号住居址とともに掘り下げられ、詳細は不明である。

ピット　検出されていない。

覆土　２層に分層される。明確に１号住居址とは区別される覆土であった。

遺物　残存する覆土中からの出土遺物は明確でない。１の出土位置は１号住居址の北壁直下から出土したが、この状況は６号住居址から１号住居址への混入と考え、本住居址出土遺物として扱った。完形で端部が非常にシャープな作りとなっており、体部側面にはヘラ記号が残る。陶邑古窯跡群で生産されたものと考えられる。２も１号住居址出土のものであるが１同様の扱いである。土師器坏の口縁部片であり、先細りしながら内湾する。

所見　1号住居址による重複により全貌は不明であるが、小型で方形を呈する住居址と考えられる。



第18図　6号住居址・出土遺物

1の須恵器坏の時期は陶邑編年のＴＫ－23(註1)段階のものと考えられ、およそ5世紀後葉と考えられる。この他、2についても5世紀後半の範疇の遺物と考えられる。出土遺物から本住居址は、5世紀後半のものと位置付けたい。

(註1) 年代観については川西宏幸氏や酒井清治氏にご教示頂いた。また、この須恵器については陶邑産須恵器として良いのではないかとのご教示を、岡林耕作氏、米川仁一氏などからも得ることができた。

6号住居址出土物観察表

図版No.	器形 器種	法量 (cm・g)	残存 出土状況	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
第18図 1	須恵器 坏	A: 10.5 C: 4.4	完形 1号住 床上	良好	大粒の長石中量	青味がかる灰、破面は灰赤	口縁部横ナデ。口縁部の立ち上がり端面内傾する。受け部の先端は鋭く平坦面を持ち、自然釉が部分的に付着。同所には蓋の癒着痕跡あり。底部は回転ヘラ削り(時計回り)され、丸みを持つが、底面は平坦となる。体部にヘラ記号あり。	陶器邑産
2	土師器 坏	A:〔13.6〕 C: (3.5)	破片 1号住覆土	良好	長石・石英中量	橙	口縁部内湾。体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面はナデ。	

第２節　遺構外出土遺物（第19・20図　ＰＬ13～15）

遺構確認以前および住居址以外のグリッド範囲より天箱１箱弱の遺物が出土した。時期は縄文時代早期前半の沈線文系土器から平安時代に及ぶ。

１～31は縄文時代の土器片でいずれも深鉢形土器である。1･2は早期前半沈線文系土器でともに半截竹管状工具による1本引きの沈線文で文様が描かれる。１は上方が平行に巡り下半は菱形状の区画文が描かれ、区画文内は垂下する短沈線文が充填される。２は工具の異なる沈線文が横位に巡り、下半は斜沈線文が描かれる。ともに胎土に長石を多量に混入していた。3･4は早期後半の条痕文系の土器で、ともに表裏とも縦位条痕文が施文される。胎土には繊維を混入している。４は内面に炭化物が付着していた。

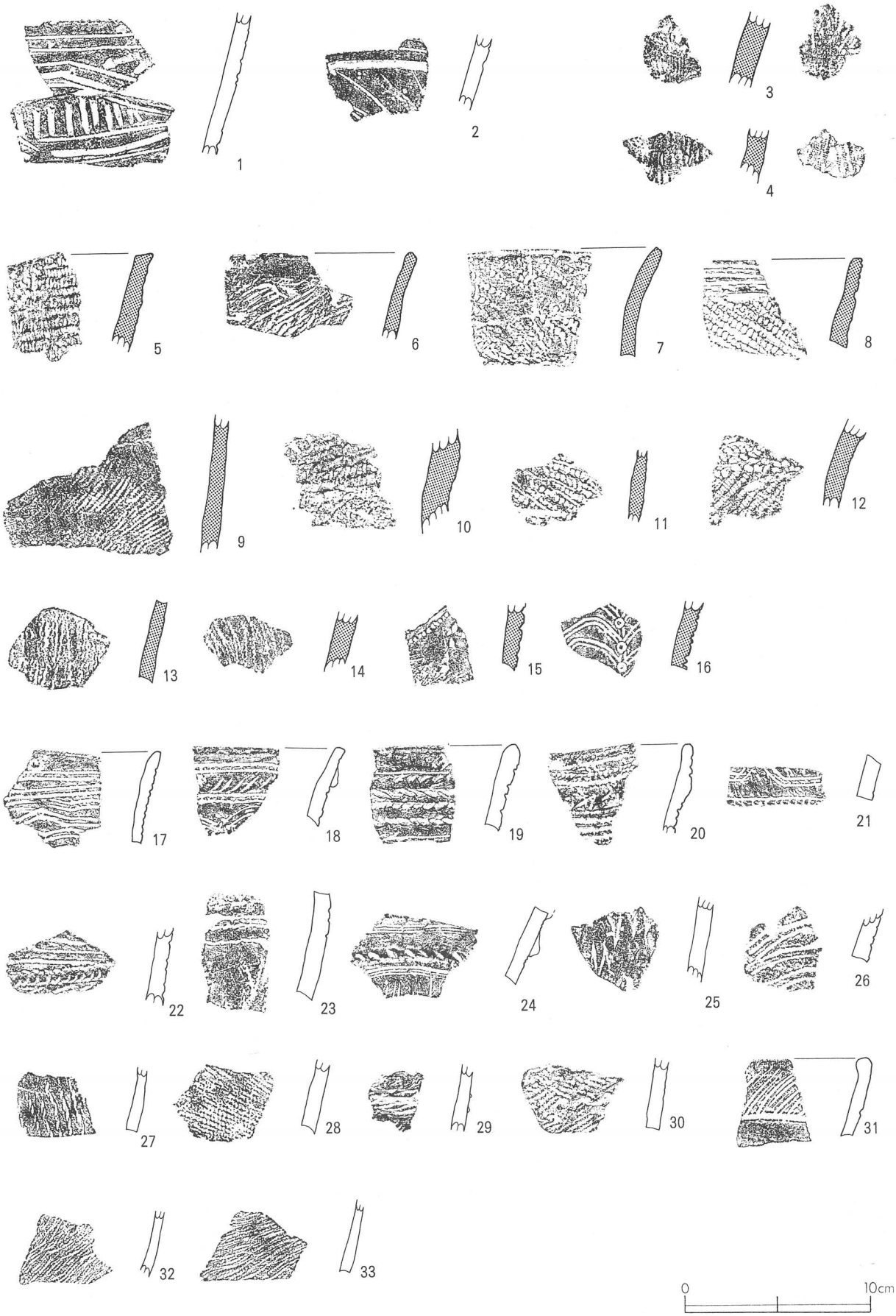
５～16は前期前半の土器でいずれも胎土に繊維を混入していた。５は波状縁、口唇部は平坦で内側に削がれた様相を呈する。０段多条RLか。６～８は平縁、６は口唇部が丸みを帯び、口縁部に狭い無文帯を有する。下半は無節Rlである。７は大きく外反し、口唇部が沈線文状に浅く凹んでいる。口縁部直下より条の間隔の広い単節RLが施文されている。胎土には長石を多量に混入していた。また外面には炭化物が付着する。８は平坦な口唇部を有し、口唇部に平行に半截竹管状工具による沈線文が巡る。地文は０段多条LR。９は単節LRで、上方に結節が見られる。10は無節Lr、11は附加条Lr＋Lr、12は単節LR・複節RLRの二種類の縄文が施文されていた。13･14はアナダラ属系貝類による波状文である。13は胎土に長石を多量に混入しており、外面には炭化物が付着していた。15はおそらく波状縁でこれに沿って半截竹管状工具による刺突が連続し、波頂部より刺突文が垂下する。16は半截竹管状工具による肋骨文で交点に円形竹管文が配される。

17～28は前期後半の土器である。17は波状縁で、器面ヘラ削り調整後、半截竹管状工具による平行沈線と同施文具による波状文が見られる。18は平縁で、これに沿って刻みが施された低隆起帯が巡る。低隆起帯の上下方は半截竹管状工具による有節沈線文が見られ、下半は平行沈線文が描かれる。19は平縁で、幅広の有節沈線文が横方向に多段化している。20は波状縁でこれに沿って有節平行沈線が巡り、同平行沈線間には斜め刻みの施された低隆起帯が見られる。胎土には長石と石英が多量に混入していた。21はアナダラ属系貝類腹縁による押圧を地文とし、半截竹管状工具による曲線文が描かれ、下半は爪形文が巡る。22は幅広の変形爪形文が横位に巡り、上方に平行沈線文が描かれる。23は半截竹管状工具によるコンパス文が施文され、下半にはアナダラ属系貝類腹縁による波状文が施文される。24は斜刻文の施された低隆起帯の上下に櫛状工具による施文あり。25はハマグリ系貝類腹縁による波状文である。26は半截竹管状工具による弧線文。27はＬ撚糸文である。28はRL。29は地文無文で刻みのある細い浮線文が施文される。17～27は浮島式土器である。28･29は諸磯式系の土器である。

30は前期末葉から中期初頭と思われる土器である。無節Rlの結節縄文で胎土には石英と雲母を多量に混入していた。

31は後期後半の土器である。平縁で、裏面は口唇部に沿って幅が広く浅い沈線文が巡る。口縁部には横位沈線文が巡り、口唇部とこの間を斜沈線文で充填している。胎土には砂粒を多量に混入していた。加曽利Ｂ２式である。

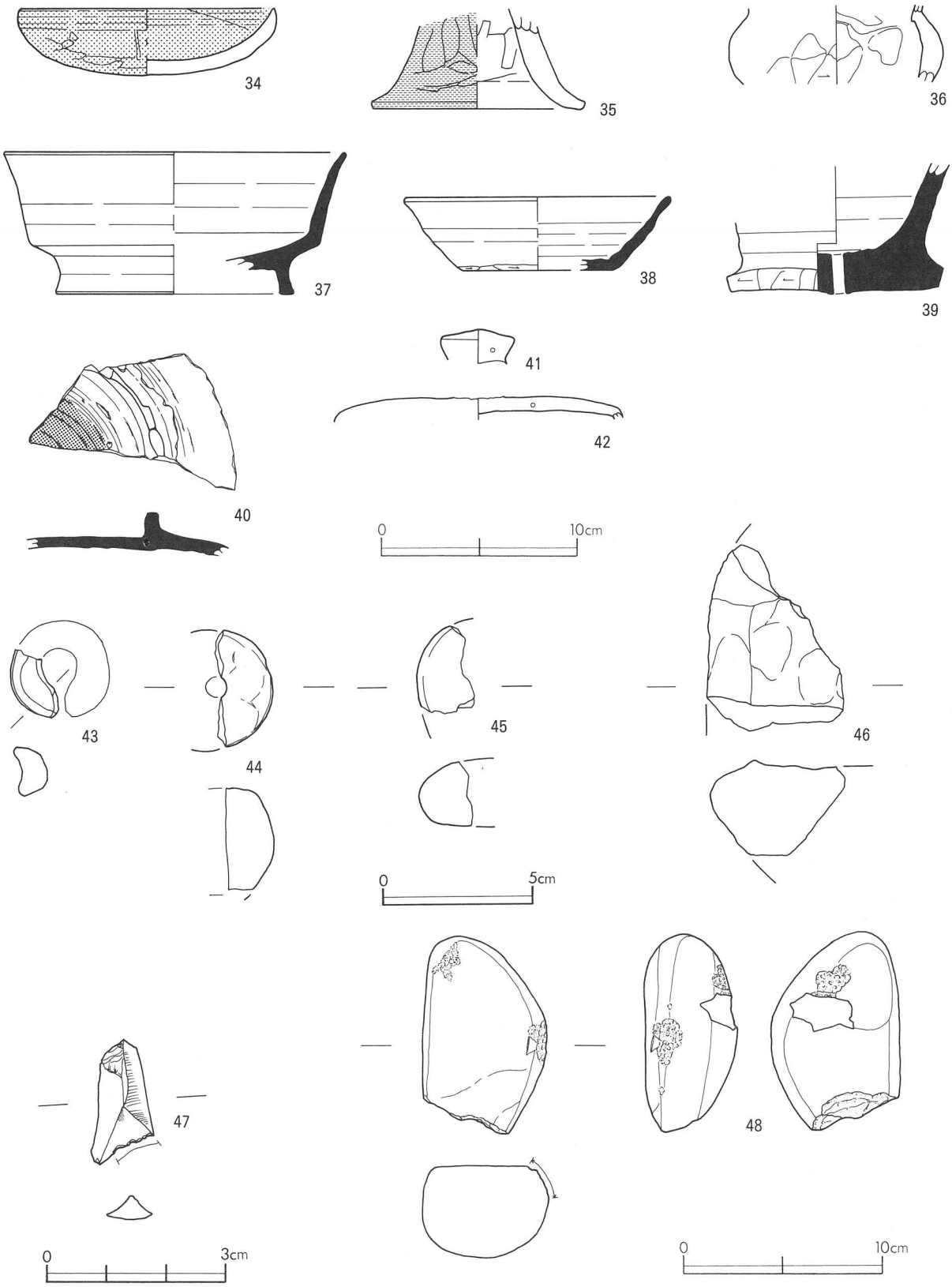
32･33は弥生時代後期と考えられるの土器破片である。附加条1種が施文されると。同一個体の破片である。市内で一般的に見られる石英･長石が多量に混入するものとは趣を異にする。



第19図　遺構外出土遺物ー1

34～37は古墳時代から平安時代の遺物である。34は土師器坏で、偏平な形態で口唇部は立ち上がり、内外面黒色処理される。35は土師器高坏の脚部であり、赤彩されている。36は土師器坩の胴部破片である。37は須恵器高台付坏である。38は須恵器坏である。39は須恵器捏ね鉢底部であり、底部の中央に焼成前の穿孔が1孔なされている。内底面に円形の擦痕が見られる。40は須恵器高台付盤の高台部を利用した転用硯である。口縁部を意図的に打ち欠いている。高台内面に墨痕が残る。41は灰釉陶器の短頸壷蓋つまみで、宝珠つまみとなる。42と同一個体と考えられるがしっくり接合しなかったため別々に実測した。42は器面の上面にオリーブ色の釉がかかり、端部は急激に折れ曲がる。43・44は土製品であり、43は玦状耳飾り、44は紡錘車である。

45～48は石器である。45は安山岩製の研磨器である。46は多孔質安山岩製の石皿破片である。47は黒曜石製の使用痕の残る剥片である。48は砂岩製の円礫を利用した敲打器である。



第20図　遺構外出土遺物ー2

一括遺物観察表

図版No.	器形 器種	法量 (cm・g)	残存 出土状況	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
第20図 34	土師器 坏	A:〔12.8〕 C: 3.4	1／4 表土	良好	長石・石英少量、赤色粒	黒褐	扁平な丸底。口縁部は短く立ち上がる。口縁部内外面横ナデ。体部ヘラ削り後ナデ。内面ヘラナデ後ナデ。内外面黒色処理。	
35	土師器 高坏	B:〔11.0〕 C: (4.2)	脚部 3号住覆土	普通	砂粒多量、赤色粒	橙	脚部破片。裾部は短く開く。上半部は縦方向のヘラ削り、裾部は横方向のナデ。内面上半横方向ヘラ削り。	外面赤彩
36	土師器 小型壷	C: (3.8)	1／4 3号住覆土	普通	長石・雲母中量	褐	頸部から胴部の破片。短い立ち上がりを残す。体部上半ヘラミガキ。下半ヘラ削り。内面上半ヘラナデ、下半指頭痕が見られる。	外面煤付着
37	須恵器 高台付坏	A:〔17.2〕 C: 7.1 D:〔12.0〕 E: 1.3	1／3 1号住覆土	良好	長石・石英・雲母中量	灰 灰オリーブ	体部下端から直に立ち上がり、やや外反する。稜は明瞭。体部は回転ナデ。高台は「ハ」字状に開く。付け高台。底面は回転ヘラ削り。	
38	須恵器 坏	A:〔13.8〕 B:〔7.6〕 C: 3.6	1／5 1号住覆土	良好	長石・雲母多量	灰	体部内湾、口唇部外反。回転ナデ。体部下端手持ちヘラ削り、底面一方向のヘラ削り。器高は低く底径は大きい。	
39	須恵器 捏ね鉢	B: 10.5 C: (6.4)	底部 遺構外	普通	石英多量、長石・雲母中量	灰	体部回転ナデ。底面からの立ち上がり部は、手持ちヘラ削り後ナデ。底面内側穿孔部の周辺は摩滅している。底面中央に焼成前穿孔1孔。孔径0.5ｃｍ。	
40	須恵器 転用硯	C: (1.8)	1／4 1号住覆土	普通	長石・石英・雲母微量	黄灰	高台付盤の高台部を利用した転用硯。口縁部は欠損し、やや磨れている。高台部内面は回転ヘラ削りがなされ、墨痕が残る。	
41	灰釉陶器 蓋	C: (1.6)	つまみ部 1号住覆土	良好	黒色粒多量	灰黄	先端は丸みを帯びる宝珠つまみ。上面の釉は風化し、側面に緑色の釉が残る。接合部には同心円状の接合痕が残る。	
42	灰釉陶器 蓋	C: (1.1)	1／2 1号住覆土	良好	黒色粒多量	オリーブ灰	短頸壷の蓋か。全体に扁平。端部は丸みを帯びて折れ曲がる。表面のみ施釉。つまみ接合部には同心円状接合痕が見られる。	
43	土製品 玦状耳飾り	長: (3.9) 幅: (1.6) 厚: (2.4) 重: (4.4)	1／3 5号住覆土	普通	砂粒多	にぶい赤褐	下向きＣ状の形態で、断面形は崩れたコの字状をなし、側面が凹む。孔の開く中央部の器厚が薄い。	
44	土製品 土玉	長: (3.9) 幅: (1.9) 厚: (3.4) 重: 23.7 孔径: (0.7)	1／2 遺構外	普通	白色粒多量	にぶい黄橙	断面いびつな楕円形。器面に指頭痕あり。	
45	石器 磨石類	長: (2.9) 幅: (1.9) 厚: (2.2) 重: (13.8)	1／4 1号住覆土	―	石材:多孔質安山岩	―	扁平。	
46	石器 石皿	長: (9.4) 幅: (6.9) 厚: (4.8) 重:(215.2)	破片 1号住覆土	―	石材:多孔質安山岩	―	上面は皿状に凹む。	
47	石器 剥片	長: 2.1 幅: 1.1 厚: 0.4 重: 0.5	― 1号住覆土	―	石材:黒曜石	―	微細な調整剥離が見られる。	
48	石器 磨石類	長: 9.9 幅: 6.4 厚: 4.7 重: (388)	ほぼ完形 4号住覆土	―	石材:安山岩	―	片側の端部は敲打により平坦となる。体部側縁に大きく3つの敲打痕が残る。一部に煤付着。	被熱

第4章 考察　環状土製品について

Ⅰはじめに

本遺跡の5号住居址では、カマド焚口火床部より環状土製品と管状土製品が１点ずつ出土した。これらの土製品については、その形態から或ものを模造した土製品と考えられる。一般的に土製の模造品は、祭祀遺物として扱われることが多く、本資料に付いても同様な扱いが妥当と考えられる。

この場では、本遺跡出土環状土製品と同様な形態的特徴を持つものが出土した遺跡を取り上げ、その出土遺構や他の伴出土製品について触れてみたい。本遺跡出土例を含め同様な形態的特徴を持つものは、数は少ないが5遺跡で確認できた。

Ⅱ各地の類例

1　茨城県土浦市二又遺跡出土例(第21図１)

遺跡は、花室川から派生した谷津が刻み込んだ、標高２０ｍの舌状台地上に位置する。調査面積が狭いため集落の様子は不明である。１辺7.5ｍを越す大型の５号住居址の、カマド焚口火床部より環状土製品と管状土製品が1点ずつ出土した。それぞれ完形である。本住居址の時期は６世紀後半と考えられる。管状土製品については切子玉又は棗玉を模したものか。

本資料は断面円形の粘土紐を環状に円め、その末端をつまんで接合させたものである。末端の接合部は丁寧にナデられず、その痕跡が明瞭に残っている。最大径は外側で2.7cm、内側で1.55cm、重さ2.5ｇである。

2　茨城県稲敷郡桜川村尾島貝塚出土例(第21図２)

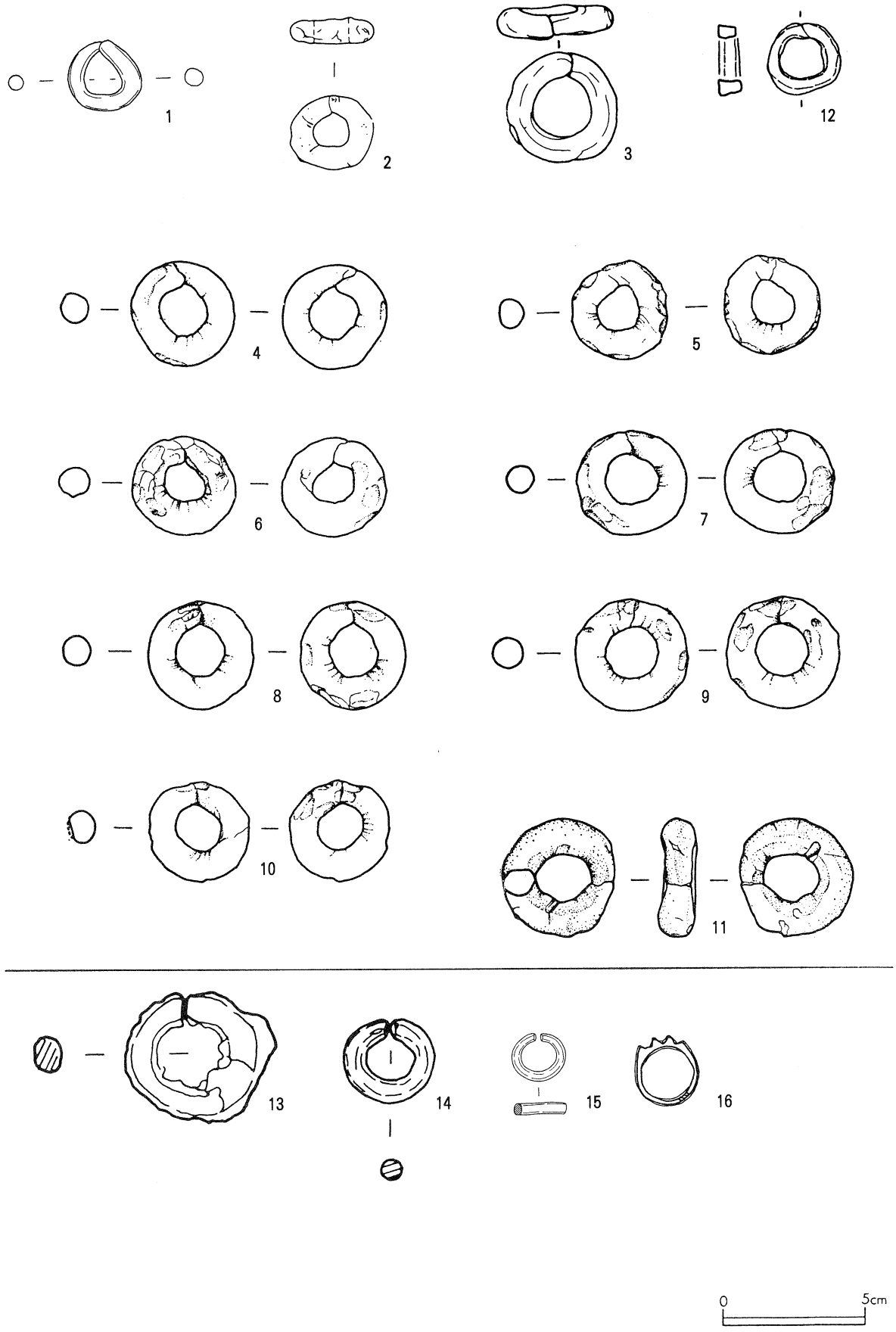
遺跡は、霞ヶ浦内唯一の島であった浮島の東端、標高３～５ｍ前後の砂洲上に存在する。この遺跡は、尾島神社と近接し、古くから滑石製模造品が多数採集され、祭祀遺跡として知られている。

1986年の県道の改良工事に伴い調査が行われ、竪穴住居址や掘立柱建物跡が確認された。そして土製模造品･手捏ね土器などが集中して出土した祭祀遺構や、滑石製模造品製作工房も確認された。土製品を中心とした祭祀遺構の時期は、6世紀後半を中心としたものと考えられる。

環状土製品は、H16h1-11区の祭祀跡及びH16i3-6区の祭祀跡間のH16i2区から出土した。報告書内では｢土製環状模造品｣の名称で1点のみの出土となっており、完形品である。形状は断面円形を呈する粘土紐を環状に円め、その末端を接合したものである。接合部には明瞭な接合痕が残る。最大径は外側で2.8cm、内側で1.2cmである。重さは5.0ｇ。

調査エリア内からは、手捏ね土器や鏡形･鍬形等の土製模造品や石製模造品が多数出土しているが、土製模造品の集中する場所から石製模造品の出土は少ないようである。

本遺跡は茨城県内を代表する祭祀遺跡といえる。そして、過去の研究ではこの祭祀遺跡の性格を、単なる在地祭祀の痕跡とするのではなく「大和王権の公的祭祀場」と解釈する向きもある(註1)。



第21図　環状土製品の類例と参考資料

3　福島県いわき市夕日長者遺跡出土例(第21図３)

夕日長者遺跡は太平洋までせり出した丘陵上に位置し、海岸線からの距離はおよそ2kmを測る。環状土製品(報告書では土製環とも表記される)が出土したのは第5号住居跡で、遺跡内で最も住居跡数が増える古墳時代後期栗囲式期とされ、7世紀前半に比定(註2)されている。

環状土製品は、第5号住居跡のカマド袖西側から土製の模造鏡や丸玉と一緒に出土した。住居跡内から出土した祭祀関連遺物は、土製模造品として鏡５点･環状土製品１点･勾玉５点・臼玉２点が出土し、滑石製模造品として双孔板１点･単孔板１点が出土している。

この環状土製品は断面円形の粘土紐を環状に円め､その末端を接合させたものである。その接合部には明瞭に接合痕が残る。最大径は外径で3.9cm､内径で2.1cm、重さ11.28ｇである。

第5号住居跡の出土状況については、報告書内で「単なる室内祭祀とすることはできず、郷戸的単位における共同祭祀」の想定がされている。

この環状土製品については後の研究で、土製の「耳環」と表現されている(註3)。

4　千葉県千葉市上ノ台遺跡出土例(第21図４～11)

遺跡は千葉市の北端に位置し、標高15～18mの東京湾に面した下総台地縁辺にある。発掘調査は区画整理事業に伴い行われたもので、1973年から1976年まで３次にわたり実施された。調査エリア内からは、古墳時代の竪穴住居跡が332軒確認され、古墳時代後期を中心とするものである。

環状土製品が出土した遺構は、Ｗ－46住居址、２Ａ－53住居址である。これらの資料を報告書の凡例では「環状土製品」と表記し、本文中では「土製耳環」・「環状土製品」が用いられている。

Ｗ－46住居址では環状土製品が7点(第21図4～10)出土しており、いずれも完形である。住居址床より1点、カマド南床より２点、カマド東床より3点、カマド西床より1点出土している。４は外径3.7cm・内径1.8～1.7cm・厚み1.0cm・重さ13.1g、５は外径3.5～3.4cm・内径1.5～1.55cm・厚み0.9cm・重さ12ｇ、６は外径3.7～3.45cm・内径1.45～1.4cm・厚み1.15cm・重さ12.45ｇ、７は外径3.9～3.7cm・内径1.85～1.75cm・厚み1.0cm・重さ14.2g、８は外径3.8～3.7cm・内径1.85～1.72・厚み1.02cm・重さ12.25ｇ、９は外径5.0～4.9cm・内径1.8cm・厚み1.1cm・重さ16.9g、10は外径3.55cm・内径1.6cm・厚み0.95cm・重さ12.55ｇである。いずれも完形である。いずれも接合部に明瞭に接合痕を残している。

この他、カマド南床より土製勾玉1点、カマド東床土製勾玉2点、カマド付近覆土より土製勾玉が1点出土している。これらは、本住居址出土の土器からすれば6世紀後半頃のものと考えられる。

２Ａ－53住居址内には、２時期のカマドが作られ、貯蔵穴は３時期のものが確認されている。先のカマドは近接した時期のものと思われるが、貯蔵穴の１つは全く別遺構のものの可能性が考えられており、重複が激しいことがうかがえる。本住居址から環状土製品が1点出土した。

11の環状土製品は、貯蔵穴から出土したがいずれの貯蔵穴から出土したかは不明。外径は4.1～3.9cmで内径は2.0～1.65cmで、厚さ1.2cm、重さ14.9ｇで完形ある。「長さ約12、径1.2の棒状粘土の両端を接合し環状にした大型耳環。」とある。接合部に明瞭に粘土紐接合痕を残している。

この他、カマド１内灰層から滑石製剣形模造品2点、土製丸玉1点、土錘1点が出土している。同カマド床灰層から土製勾玉4点出土。また住居覆土からは土製勾玉2点が出土している。

環状土製品の廃棄時期は出土した土器からすれば6世紀前半頃のものか（註４）。

5　山口県美祢郡秋芳町国秀遺跡出土例(第21図12)

遺跡は内陸部の嘉万盆地の北縁に位置し、瀬戸内海へと流れる厚東川と日峰川によって開析された扇状地の扇端部に立地する。調査は1991年の圃場整備事業に伴い行われた。その結果、県内最大規模を有する集落遺跡であることが明らかにされた。時期的には６世紀から８世紀代を中心とした集落構成となっている。特に６世紀から７世紀前半の竪穴住居址が一番多い。また、集落内でのスラグや銅鉱石の出土から、７世紀後半以降に銅及び鉄生産が行われていたことが明らかとなっている。

環状土製品は、西壁にカマドを持つ93号住居跡の南西隅付近から楕円形の土製模造鏡９点と共に出土した。報告書内ではここで言う環状土製品を「指輪の模造品」・「土製リング」と表現している。その形態は粘土紐を環状に円めその末端を接合させたものである。接合痕は明瞭に残されている。断面形は台形をなし、板などの上で製作したことが想定される。最大外径は2.6cm、内径1.5cm、重さは不明である。

本住居址の時期は報告書内では明確ではないが、７世紀前葉のものと考えられている(註５)。

Ⅲ環状土製品・耳環・指輪（第21図13～16）

これらの環状土製品が何を模造したかについては、現状のところ上ノ台遺跡での報告等で見られる耳環ではという指摘や、国秀遺跡での指輪を模して作られたのではと言う指摘がある。形態的特徴からの判断では耳環の模造品としたほうが妥当と考えられる。それは耳環の切れ目の表現として、環状土製品の明瞭な接合痕が存在するのではと想定できる。切れ目としてではなく、明瞭な接合痕となっている理由としては、この土製品が模造品であり、正確に形態を真似る必要のないものであったためと思われる。形態的にはこのようなもので、ことは充分足り得たものと思われる。

また、環状土製品の断面形態の多くが円形であり耳環との関連性が指摘できる。耳環について言えば、全国的に古墳時代後期の古墳から多数出土しており、同期の竪穴住居址出土品にも往々に見られる。このことから、同期において重要な装飾品であり、重要な道具であることは間違いあるまい。

環状土製品の大きさについては、上記に示した資料からすると、大小２つ位のグループに分かれる。大きいもののグループは、夕日長者遺跡出土例と上ノ台遺跡出土例。この中で一番大きいものは上ノ台遺跡Ｗ－49号住居址出土の10が外径5cmを示し最大のものといえる。小さいもののグループとして二又遺跡・尾島貝塚・国秀遺跡出土例が外径2.5cm前後の大きさである。

ここで耳環について全県下の集成がなされた千葉県の状況(註６)について見てみると、計測数値が分かるもので、最小外径のものは1.3cm、最大のものは4.8cmであり、外径2.3～2.6cmのものが多い。第21図13～15は参考までに掲載したもので、13・14はつくば市中台遺跡第39号墳出土のものである。13は外径4.6～4.5cm、14は外径3.2～3.0cmである。15は土浦市寿行地古墳出土のもので、外径1.86～1.66cmのものである。

環状土製品の大きさの大小は、耳環の外径におけるばらつきの反映とも解釈できようか。

これに対し、古墳時代の指輪については、沖ノ島祭祀遺跡・新沢千塚古墳群第126号墳出土のものが有名であるが、耳環に比べ非常に出土例が少ない上に、形態が薄い板状のものがほとんどのようで

ある。そして、繋ぎ目(接合部)は極力消し去ることを心がけている様子がうかがえる。加えて装飾的であることが特徴と言えるであろう。

茨城県南地域出土の指輪の出土例として、稲敷郡桜川村柏木遺跡がある。遺跡内の7世紀前半の時期とされる9号住居跡から1点出土した。最大長2.5cm・内径1.9cmのもので、一部に鋸歯状の装飾が付き、装飾部分以外の断面形状は薄い板状を見せている。材質については、報告書の記載では金属と言うのみで不明であるが、写真の表面の状況から銅製と思われる。

千葉県下の指輪の状況では、多くが弥生時代のものであるが、外径1.9～2.6cmの範囲に収まっている(註７)。全体的な傾向として、指輪より耳環の方が外径に見る大きさの幅が広い特徴が読み取れる。

Ⅳまとめ

最後に上記遺跡出土の環状土製品について全体的な特徴などについて述べたい。まず形態的な特徴では、いずれも基本的には断面形状丸い粘土紐を環状に円め、その末端の接合痕を明瞭に残している。この接合痕に関しては、意図して製作者が残したものと考えられる。これらの資料はいずれもほぼ完形品である。このような諸特徴や外径の大きさ等から耳環を模した土製品と考えられる。

これらの環状土製品を出土した遺構は、竪穴住居址が４遺跡で尾島貝塚のみが祭祀跡と祭祀跡の間隙から出土している。この他、一緒に出土した土製品に関しては二又遺跡以外では、直接伴出又は間接的に周辺から、複数の土製の模造鏡や玉類等が一緒に出土している。このような出土状況から、この環状土製品も祭祀にかかわる模造品と考えられる。そして、これらの出土品はカマドを中心とした位置から出土する場合が多い。この傾向は環状土製品のみの特徴ではなく、土製模造品全般にわたるものといえる。この特徴は竪穴住居址出土土製模造品を考える場合に重要なポイントとなろう。

これらの環状土製品を出土した遺構の時期については、多くが６世紀後半から７世紀前半の範囲内に入るものと考えられる。この６世紀後半から７世紀前半と言う時期は、前段階の滑石製模造品製作が終焉を迎え、土製の模造品が盛んに作られる時期でもある（註８）。

そして、環状土製品出土遺跡が存在する地域は、現状で国秀遺跡以外いずれも古代東海道東端付近の地域にまとまっており、興味深い状況を見せている。加えて国秀遺跡出土例の存在により、これらの環状土製品が出土数の多寡はあるにせよ、より広い範囲から出土する可能性も秘めている。

註

註１茂木雅博「浮島の祭祀遺跡」『風土記の考古学■常陸国風土記の巻』同成社 1994

註２高松敏雄「福島県の祭祀遺跡」『東国土器研究』5号　東国土器研究会 1999

註３矢島敬之「荒田目条里遺跡礼堂地区出土の石製・土製模造品ノート」『いわき市教育文化事研究紀要』第11号
(財)いわき市教育文化事業団 2000

註４(財)千葉県文化財センター『千葉市榎作遺跡』千葉県文化財センター調査報告第216集 1992内の調査のまとめの時期区分第Ⅱｃ期から第Ⅲ期の土器様相に類似すると思われる。両者の時期のうち新しい方を想定した。

註５三宅正浩「祭祀の遺跡と遺物」『まつるかたち－古墳・飛鳥の人と神－』大阪府立近つ飛鳥博物館 1997

註６千葉県文化財センター『研究紀要17－県内の青銅製品の集成と分析－』1997

註７註６と同じ

註８東日本埋蔵文化財研究会『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』第Ⅱ分冊－東日本編Ⅱ－関東地方 1993内の笹生

衛・小林清隆・神野　信「千葉県内における祭祀遺跡の状況」が参考。

参考文献

いわき市教育委員会『朝日長者遺跡･夕日長者遺跡』いわき市文化財報告第６集 1981
駒澤大学考古学研究室『千葉･上ノ台遺跡 先史14』「本文編」・「本文編２」1982
(財)茨城県教育財団『尾島貝塚　宮の脇遺跡　後九郎兵衛遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第46集 1988
(財)千葉県文化財センター『房総考古学ライブラリー５ 古墳時代(１)』1990
(財)山口県教育財団･山口県教育委員会『国秀遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告書第152集 1992
(財)茨城県教育財団『柏木遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第74集 1992
東日本埋蔵文化財研究会『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ冊 1993
(財)茨城県教育財団『中台遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第102集 1995
土浦・出島合同遺跡調査会『寿行地古墳発掘調査報告書』1995
小沢　洋「房総の古墳後期土器」『東国土器研究』４号　東国土器研究会 1995
春成秀爾『歴史発掘４ 古代の装い』講談社 1997
松本百合子「Ｂ耳飾」『古墳時代の研究　８古墳Ⅱ　副葬品 』雄山閣 1998

第５章　調査のまとめ

今回の発掘調査は520㎡という小規模なものであった。調査エリア内から検出された遺構は、竪穴住居址が6軒確認されたのみである。その内訳は古墳時代が３軒と平安時代が３軒である。出土遺物では縄文時代から平安時代の遺物が確認されている。

以下は、時代ごとに遺物・遺構の特徴などについて述べ、まとめとする。

縄文時代

縄文時代の遺物は遺構に伴ったものはない。時期的には縄文時代早期のものとして沈線文系土器群や条痕文系土器群の土器が数点出土している。前期では中葉の黒浜式や後半の浮島式がまとまって出土している。この他、前期末葉から中期初頭段階・後期中葉に位置付けられるものが極少数認められる。土器以外のものでは、土製玦状耳飾りや石器が出土している。

弥生時代

弥生時代も遺構に伴ったものは無く、土器破片が数点出土しているのみである。

古墳時代

古墳時代は先に述べたとおり、1･5･6号住居址の３軒が検出されている。それぞれの住居址の時期は、1号住居址が6世紀末葉から7世紀初頭の範疇に、５号住居址は6世紀後半に位置付けた。

６号住居址については依存状況が悪いが、小型の住居址と考えられる。同住居址内からは明確な遺物出土状況が見られなかったが、１号住居址との重複関係に加え１号住居址に５世紀後葉の遺物が混入していることを考慮し、５世紀後半に位置付けた。

このような小型の住居址の存在は、牛久市の東山遺跡(註1)や隼人山遺跡(註２)等の中でも注目されている。先の2遺跡での住居址平面規模の統計によれば、小型の住居址とそれ以外のものとで二分化している様子がうかがえる。これらの遺跡の時期は、いずれも中期後半の範疇に入るもので、本遺跡の６号住居址が、５世紀代の小型の住居址と考えたことに対しての傍証となるものと考える。

古墳時代の出土遺物については、１号住居址出土のガラス小玉(註３)や5号住居址出土の土製模造品、そして6号住居址出土の完形の須恵器坏身が特筆される。

5号住居址の土製模造品は、環状土製品としたものと管状土製品としたもの各1点が出土している。それも大型住居址のカマド内から出土した。これらの出土品はその形態的特徴から、前者が耳環の模造品、後者は切子玉又は棗玉の模造品と考えられ、祭祀に供するためのものと思われる。

特に環状土製品については、考察で示したように類例に乏しいものであるが、現状で本遺跡を含め茨城県桜川村尾島貝塚･福島県いわき市夕日長者遺跡・千葉県千葉市上ノ台遺跡･山口県秋芳町国秀遺跡の5遺跡で確認されている。形態特徴として、粘土紐を環状に円めその末端を接合し、その痕跡を明瞭に残している。接合痕をナデ消さないところに、この土製品の模造品としての価値や意味が存在するものと思われる。このような形態的な特徴は、後期古墳の副葬品として多用された耳環末端の切れ目に通ずるものがあると考えられる。それ故に耳環を模造したものと考える。

前記5遺跡の環状土製品を出土した遺構等を見ると、その帰属時期の多くが6世紀後半から7世紀前半に位置付けられ、ちょうど石製模造品の製作が衰退し土製の模造品製作が盛んに行われる時期と一致する。そして伴う他の模造品に関しても、土製の模造鏡などと一緒に出土する特徴を持っている。また、興味深いことにいずれの遺跡でも完全な形で出土している。

二又遺跡5号住居址土製模造品の出土状況に関しては、カマド火床部より出土し特徴的な出土状況といえる。このような出土状況については多々認められ、カマドでの祭祀行為の痕跡や最終的な廃棄場所としてカマド付近が選ばれている等の考え方が想定できる。現状では後者のレベルまでしか述べられないのではと思う。二又遺跡近辺での同様な状況の出土事例として、同一台地上に位置する中新台遺跡1号住居址(註4)がある。この住居址は7世紀前半に位置付けられ、カマド内を中心として、土製の小玉や管玉・勾玉等が出土している。このカマドは、土製品が置かれる以前に壊れて覆土も堆積していた。

二又遺跡6号住居址出土とした完形の須恵器坏身は、その特徴から現在の大阪府に所在する陶邑古窯跡群で生産された可能性が高い。時期的にはその形態的特徴から、田辺氏編年(註5)のＴＫ-23段階のものと考えられ、その中でも古様を示すと考えられる。そして側面にはヘラ描きがなされ、須恵器生産段階での製作者側の便宜のため描かれたと考えられている。陶邑古窯跡群における同時期・同様なヘラ描きを持つものについては不明であるが、その後の段階のものには類例が見られる(註6)。また、本資料の遺存状況は完形であり、茨城県南地域において近年見受けられる5世紀後半代の集落出土須恵器の様相とは異なる。それは牛久市のヤツノ上遺跡や中久喜遺跡(註7)又は、土浦市宮前遺跡(註8)のように集落内で細かく割れ、破片として複数の住居址から出土する状況とは対照的といえる。本遺跡の須恵器出土例は、その最終局面における取り扱い方が単純ではないことを示している。

平安時代

平安時代の住居址については、2･3号住居址が９世紀前葉から中葉に相当する。４号住居址については、９世紀後葉に位置付けた。これらの時期以外に、1号住居址覆土上層からは8世紀末葉から9世紀初頭に位置付けられるものが複数出土しているが、明確な遺構としては認識できなかった。

住居址の形態的な特徴として、3号住居址は方形の平面形態の隅にカマドを構築している。4号住居址については、住居床面に方形･4本の主柱穴が構築され、そのうちの対する一辺の中間には浅い柱穴と考えられるものがそれぞれ確認され、補助柱穴と考えられる(註9)。

特徴的な出土遺物として、２号住居址出土では木葉下窯跡群産と考えられる胎土に白色針状物等を含む須恵器が出土し、４号住居址や遺構外では灰釉陶器が出土している。2･3･4号住居址出土ではタール状の付着物が口唇部に見られる坏があり、特に４号住居址の出土状況は興味深い。

二又遺跡が存在する花室川流域(市内)において、木葉下窯跡群産と考えられる須恵器が出土している遺跡は、谷原門遺跡Ｃ地点(註10)･扇ノ台遺跡(註11)･神出遺跡･中居遺跡(註12)･長峰遺跡(註13)で少量ながら出土している。全体的な傾向として、器形として高台付のものが目立つ感触を持つ。また、焼成の良好なものが多く、色調も独特でオリーブ灰色的なものが多い。

本遺跡で出土したタール状の付着物が口唇部に見られる坏は、燈明用の土器と考えられている。須恵器･土師器の区別はなく、時期によって主体を占める器を利用しているようである。これらは、油

(註14)を入れた土器に燈芯を添え、燃焼した結果その周囲にタール状の物質が付着したものと考えられる。この土器の使用目的は、仏教儀礼と関わりが考えられる道具類や墨書土器・墨書に関わる道具類と一緒に出土する割合が高く(註15)、単なる暗い場所での明かり取りというものではないようである。本遺跡4号住居址においても鉄鉢形土器と考えられるものや、解読不明な墨書土器と一緒に出土している。

最後に、今回の調査は狭い範囲ではあったが、古墳時代中期後半以降断続的に平安時代9世紀後葉まで居住域として利用された様子が明らかとなり、各時代の遺構からは多彩な遺物が出土したと言える。

註

註1 (財)茨城県教育財団『東山遺跡』茨城県教育財団調査報告書101集 1995の中で、5世紀後半の竪穴住居址69軒を規模や内部施設により4つに分類しているが、これらを規模のみで分類すると以下の様な傾向が見られる。住居址の1辺が5～7m代の規模を有するもの36軒で全体の52.2%を占める。また、1辺が2～3m代の規模を有するものは33軒で全体の47.8%を占め、半数近くが小型の住居址となっている。

註2 (財)茨城県教育財団『中下根遺跡　西ノ原遺跡　隼人山遺跡』茨城県教育財団調査報告書113集 1996

註3 市内の住居址出土例として石橋南遺跡1号住居址がある。「群青色」のものである。土浦市教育委員会『石橋南遺跡―田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7集―』1997

註4 土浦市教育委員会『中新台遺跡』1996　1号住居址出土遺物の中には掲載されていないが、土師器坏破片を円盤状に打ち欠いた土製品も出土している。

註5 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981　この他、中村　浩氏の編年では1期3段階の範疇のものと考えられる。

註6 中村 浩「須恵器生産に関する一試考」『考古学雑誌』第63巻第1号1977及び野上丈助「第3節 高蔵寺地区・陶器山地区出土のヘラ記号とその意義」(財)大阪埋蔵文化財センター『陶邑 V 大阪府文化財調査報告第33 』1982

註7 荒井保雄「中久喜遺跡出土の古式須恵器について」『研究ノート』3号(財)茨城県教育財団 1994

註8 (財)茨城県教育財団『宮前遺跡』茨城県教育財団調査報告書138集 1997 宮前遺跡では、未掲載古墳時代須恵器破片がＳＫ10で1点、ＳＫ99で1点、ＳＫ113で1点、ＳＩ7で40点、ＳＩ9で3点、ＳＩ10で8点、ＳＩ11で1点、ＳＩ18で1点、ＳＩ19で1点出土している。これらの須恵器破片は全体的に細かく割れて出土している。器種は甕の破片が多い。

註9 註3と同じ報告書中、古墳時代後期6世紀前半の第1号住居址にも主柱穴間に補助柱穴が見られる。

註10 土浦市教育委員会『谷原門遺跡Ｃ地点発掘調査報告書』1999

註11 土浦市教育委員会『扇ノ台遺跡』1996

註12 土浦市教育委員会『東出遺跡・神出遺跡・中居遺跡』1999

註13 (財)茨城教育財団『西郷遺跡　南丘遺跡　長峰遺跡　数光遺跡　宮塚遺跡　右籾館跡　内路地台遺跡』茨城県教育財団調査報告書64集 1991

註14 燈明用の油としては、神奈川県宮ヶ瀬遺跡群馬場（№3）遺跡出土燈明用坏の残存脂肪分析の結果が興味深い。
同遺跡出土の燈明用坏では、イルカ・シカ・モズのような動物の油やエゴマのような植物の油が混用されていた可能性が推測されている。
中野益男 中野寛子 菅原利佳 長田正宏「宮ヶ瀬遺跡群馬場（№3）遺跡から出土した燈明皿に残存する脂肪の分析」『宮ヶ瀬遺跡群Ⅶ 馬場（№3）遺跡』かながわ考古学財団調査報告9 (財)かながわ考古学財団 1996

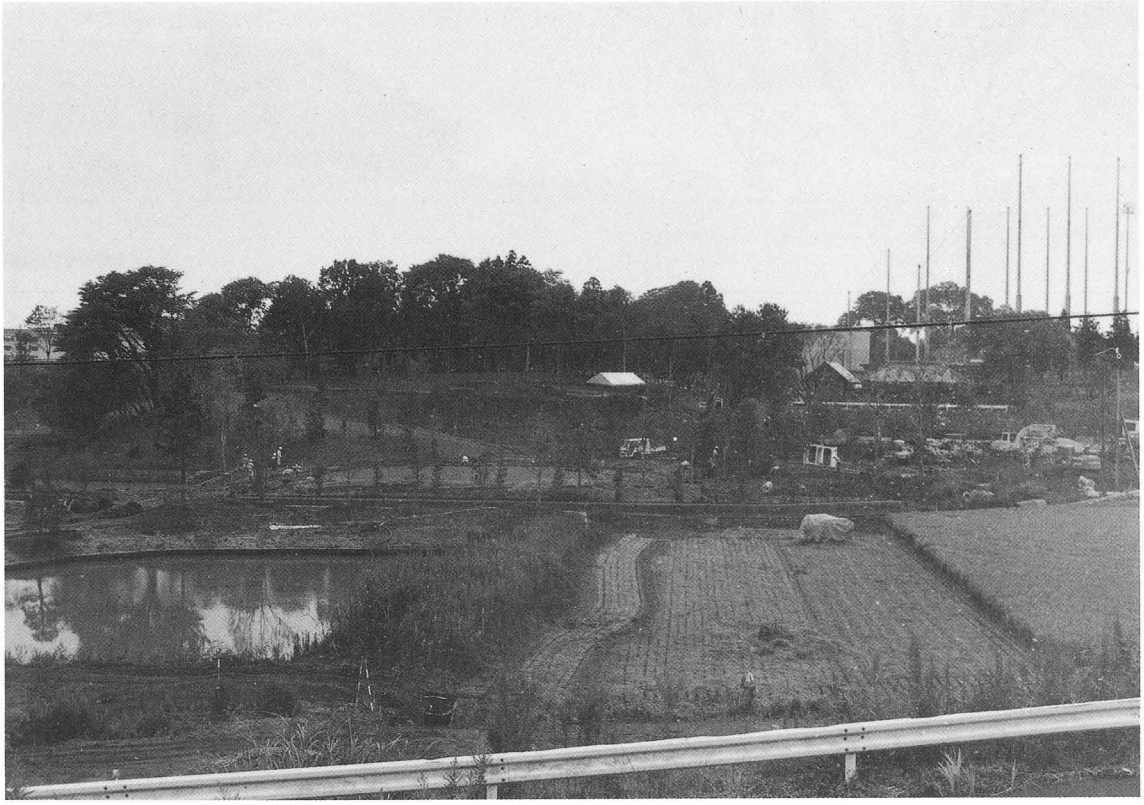
註15 津野　仁「栃木県出土の古代燈明具」『栃木県考古学会誌』第13集 1991

参考文献

大宮市遺跡調査会『原遺跡』1987
中村　浩『研究入門　須恵器』柏書房 1990
浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器(1)」『研究ノート』創刊号 1993
樫村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』第2号 1994
㈶千葉県文化財センター『房総考古学ライブラリー7 歴史時代(1)』1994
茨城県『茨城県史資料編　奈良・平安時代』1995
大場磐雄『まつり』学生社 1996
倉吉博物館『まつりの造形 －古代形代の世界－』特別展展示図録 1997
赤井博之「新治窯跡群の基礎的研究 －奈良・平安時代の須恵器編年について－」『土曜考古』第21号 1997
樫村宣行・土生朗治・白石真理「茨城県における5世紀の動向」『東国土器研究』5号 1999
樫村宣行「茨城の祭祀遺跡」『東国土器研究』5号 1999
仙波亨「コーナーに竈をもつ住居跡について」『研究ノート』9号 2000

写　真　図　版

遺跡位置写真（国土地理院 昭和52年撮影）



調査区遠景（国道354号より）

調査区近景（国道354号方面をのぞむ）

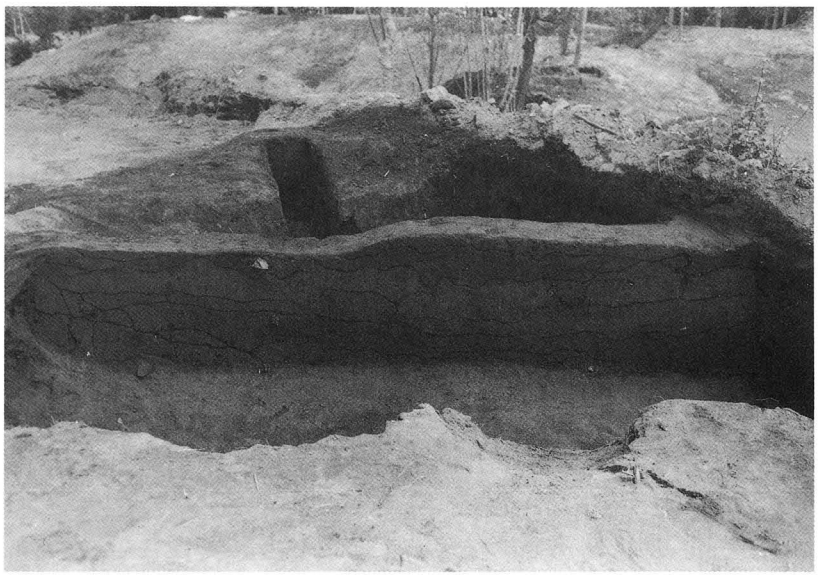
調査区全景(1)

調査区全景(2)

1･6号住居址完掘

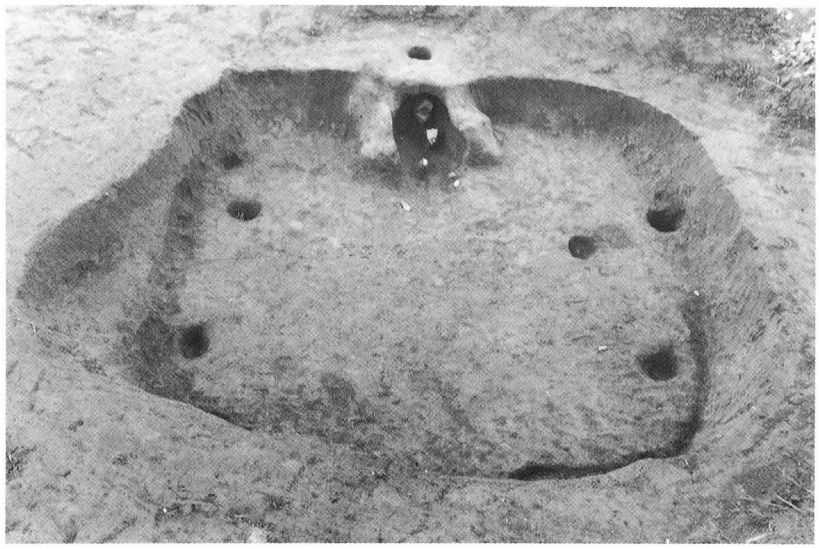
1号住居址遺物出土

1号住居址覆土



2号住居址完掘

2号住居址カマド遺物出土



3号住居址完掘

3号住居址カマド遺物出土

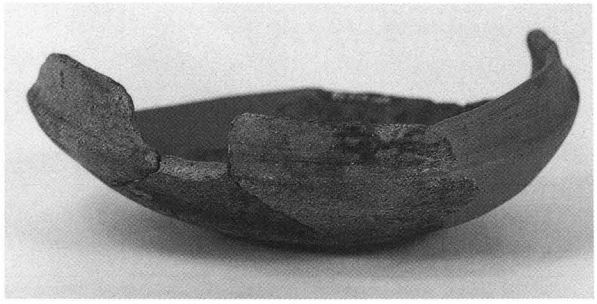
4号住居址完掘

4号住居址カマド遺物出土

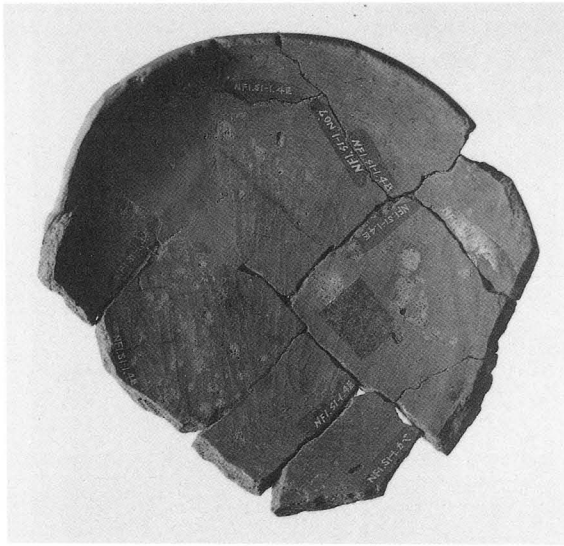
５号住居址完掘

５号住居址カマド完掘

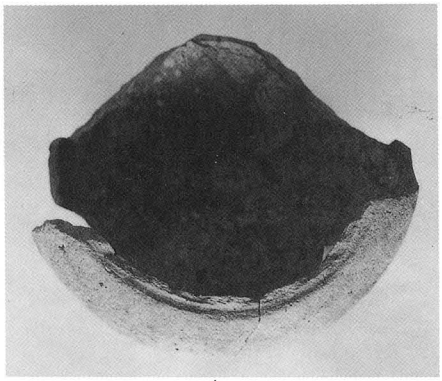
５号住居址カマド完掘



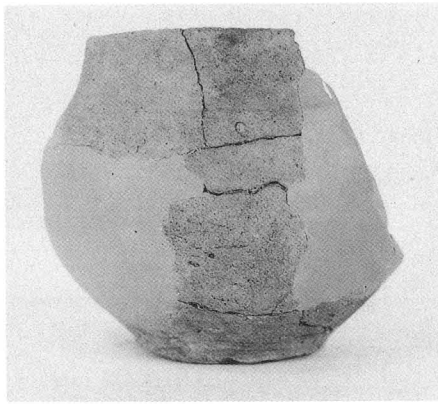
1号住居址 1



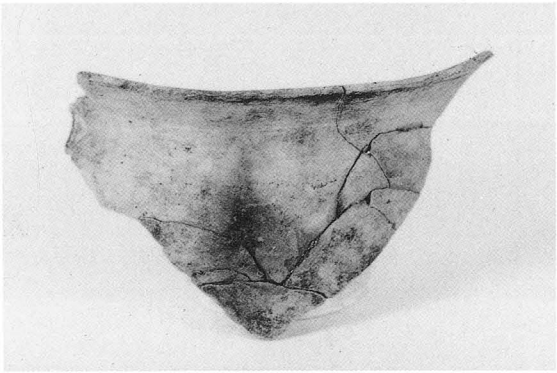
1号住居址 2



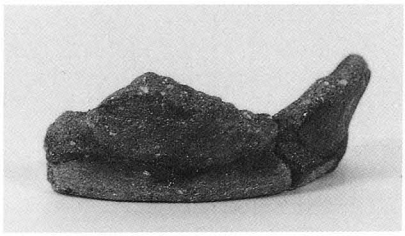
1号住居址 3



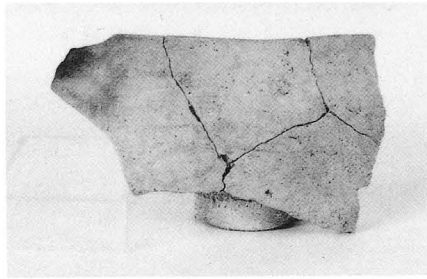
1号住居址 4



1号住居址 5

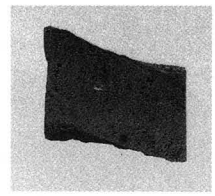


1号住居址 6

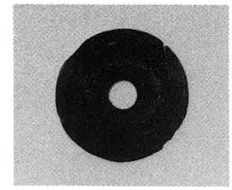


1号住居址 7

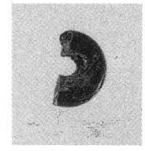
1 号住居址 8



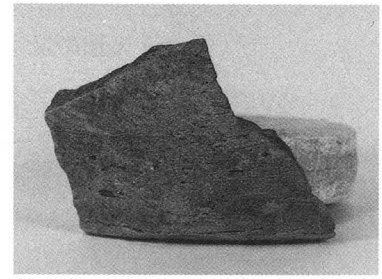
1 号住居址11



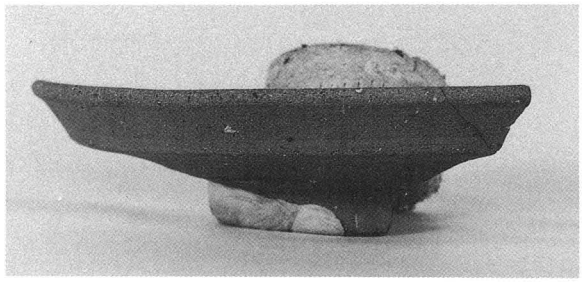
1 号住居址10



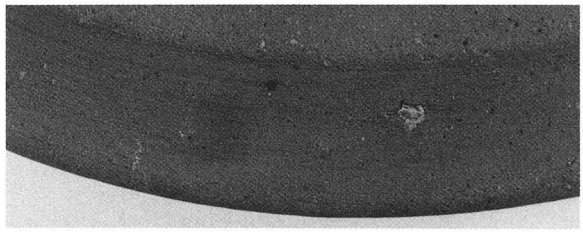
1 号住居址12



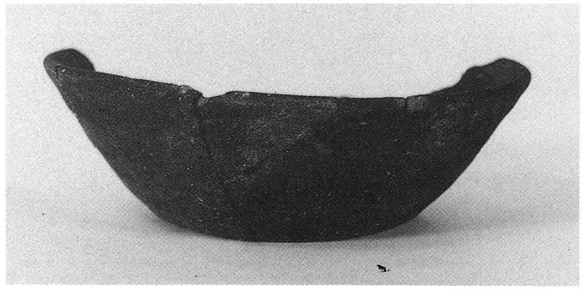
2 号住居址 5



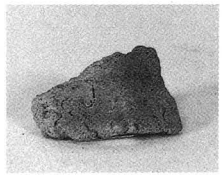
2 号住居址 2



2 号住居址 2 拡大

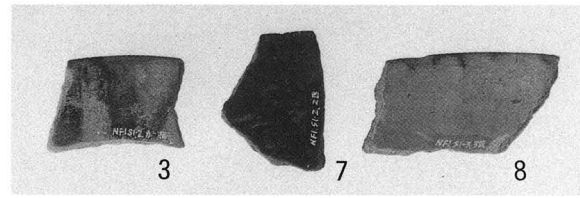


3 号住居址 1

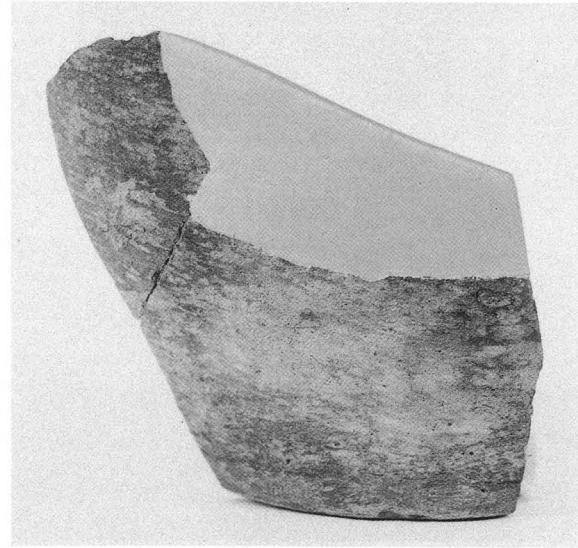


3 号住居址 4

3 号住居址 3

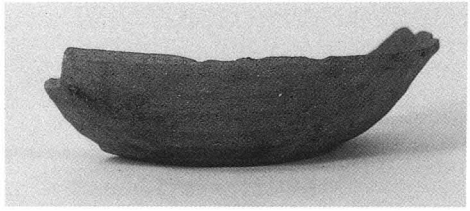


2 号住居址3･7･8



2 号住居址 6

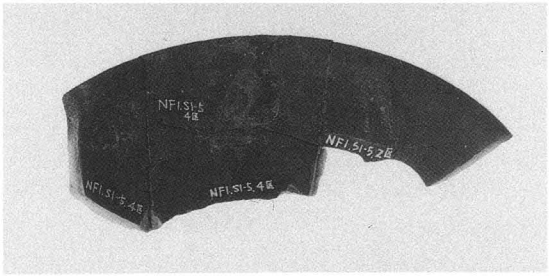
3 号住居址 2



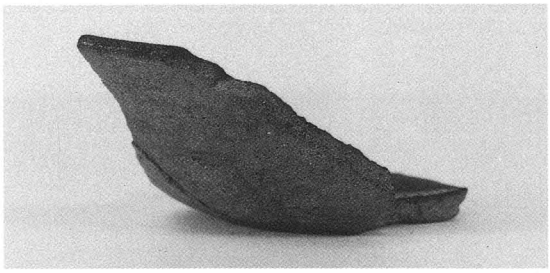
4 号住居址 1

4 号住居址 3

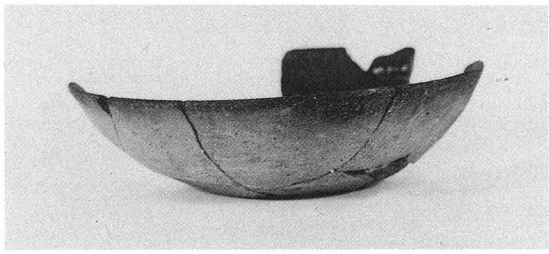
4 号住居址 5



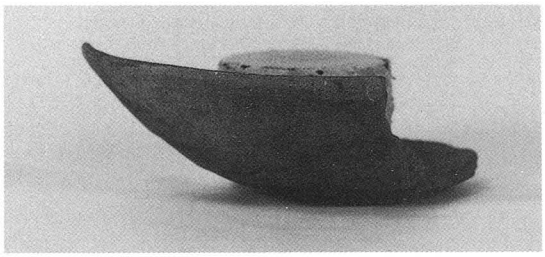
4 号住居址 6



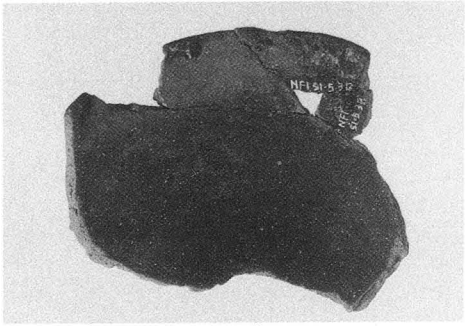
4 号住居址 7



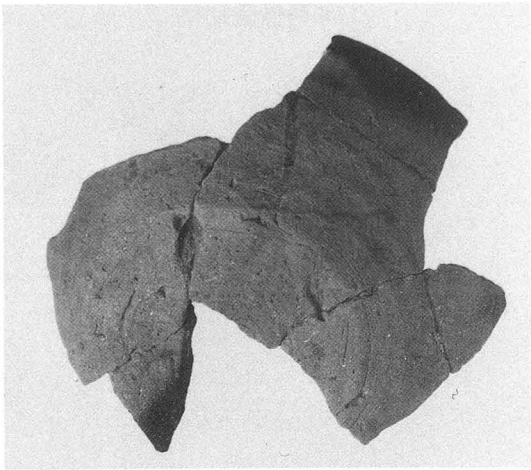
4 号住居址 8

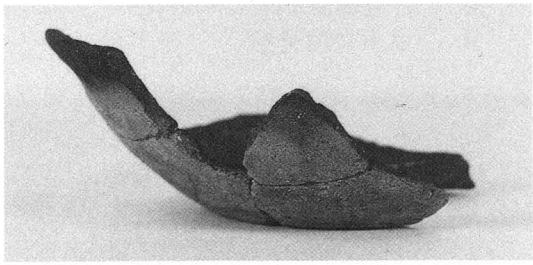


4 号住居址 2

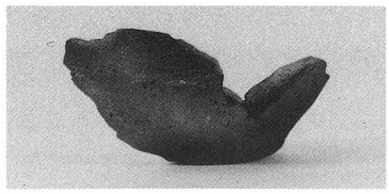


4 号住居址 4



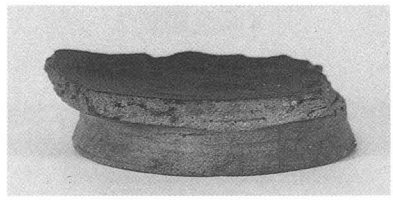


4 号住居址 9

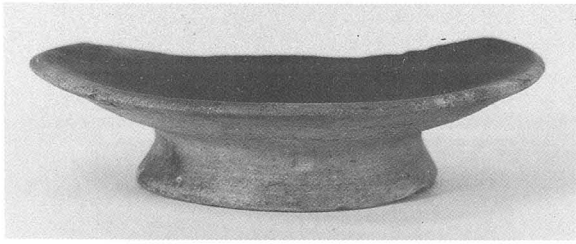


4 号住居址10

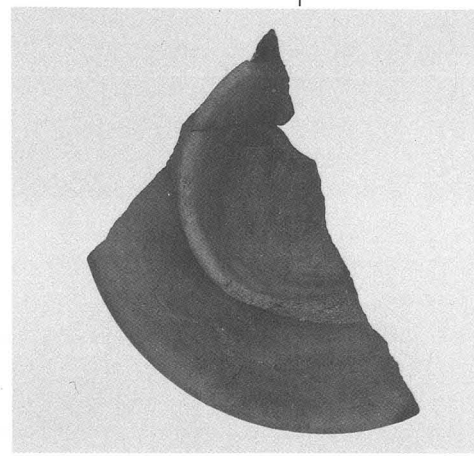
4 号住居址12



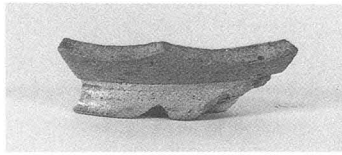
4 号住居址13



4 号住居址15

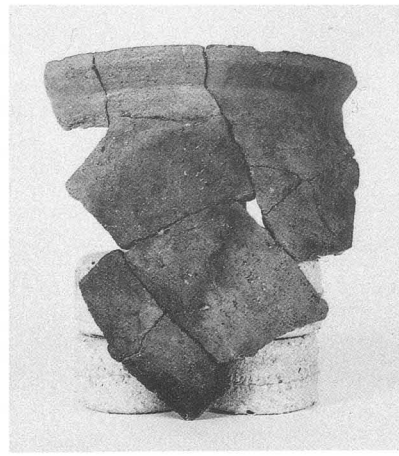


4 号住居址14

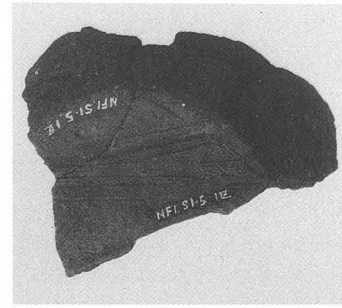


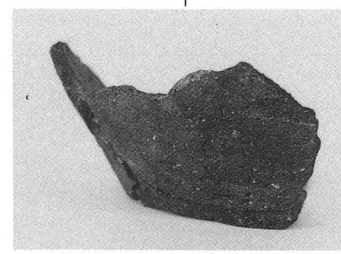
4 号住居址16

4 号住居址18

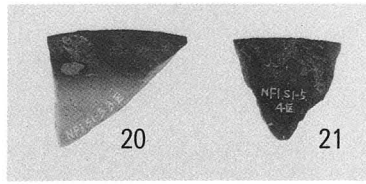


4 号住居址19

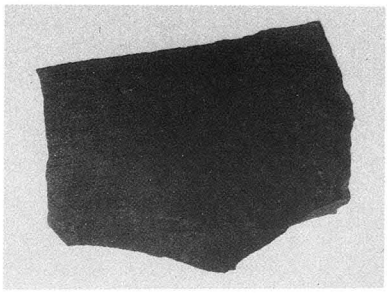




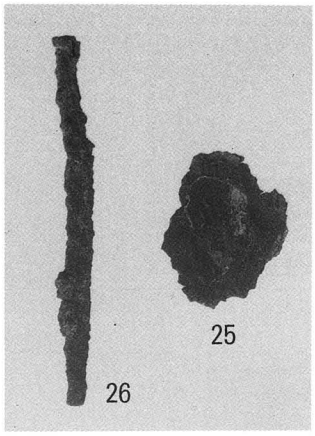
4 号住居址17



4 号住居址20・21

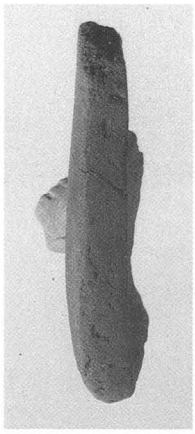


4 号住居址22

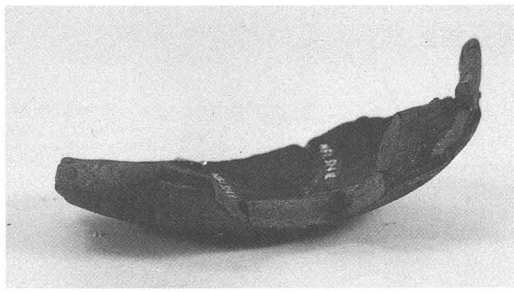


4 号住居址25・26

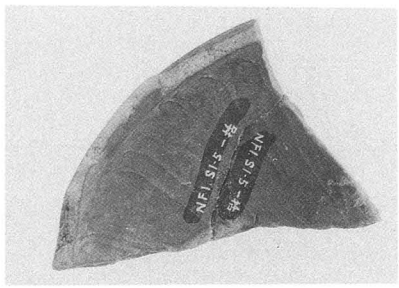
4 号住居址24

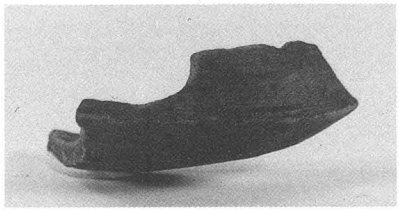


4 号住居址23

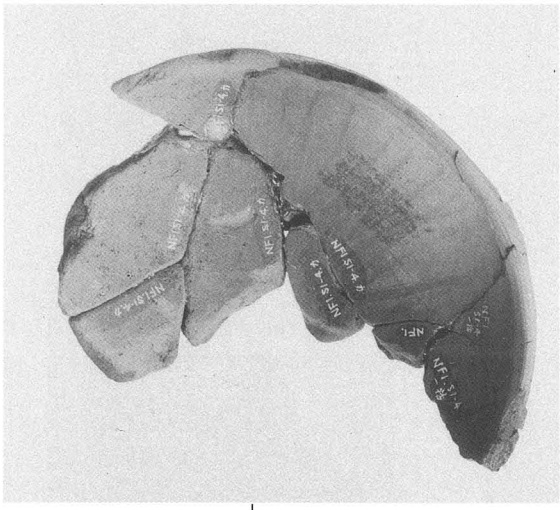


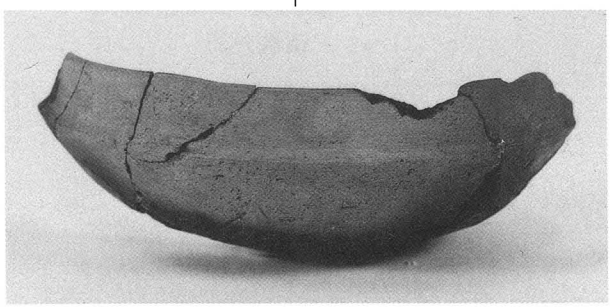
5 号住居址 1



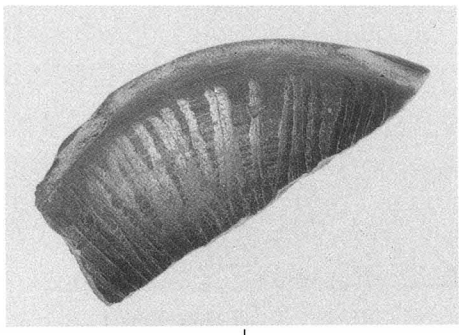


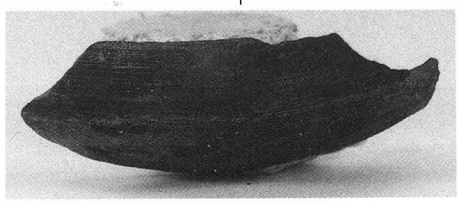
5 号住居址 2



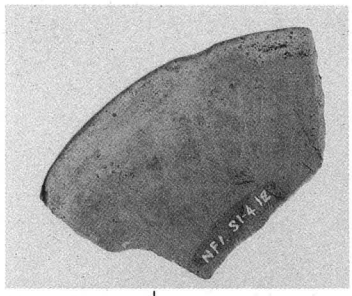


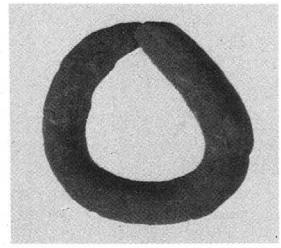
5 号住居址 3





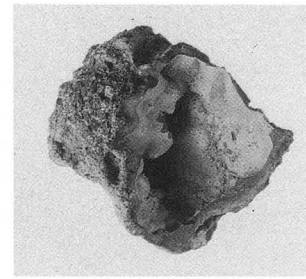
5 号住居址 4



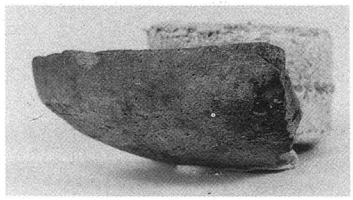


5 号住居址 7

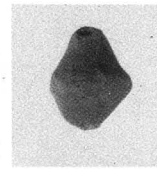
5 号住居址 9



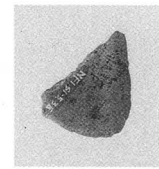
5 号住居址11



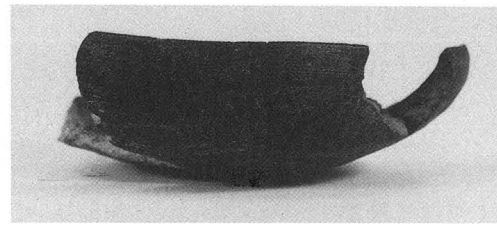
5 号住居址 5



5 号住居址 8

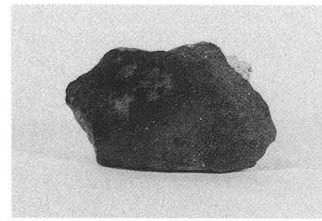


5 号住居址10

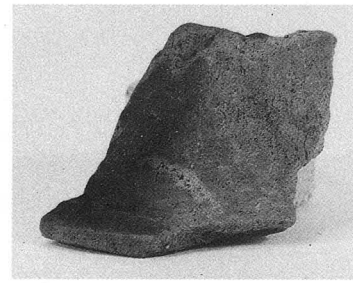


遺構外34

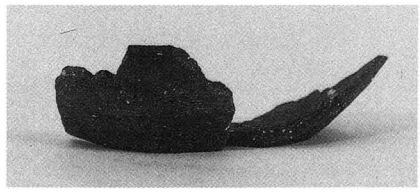
6 号住居址 1



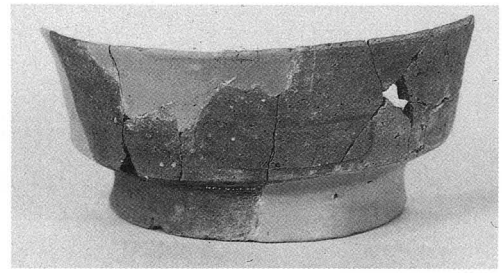
遺構外36



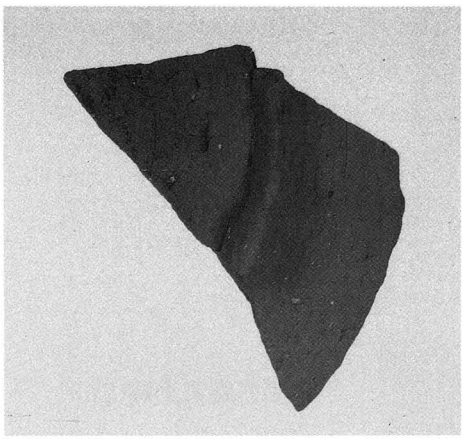
遺構外35



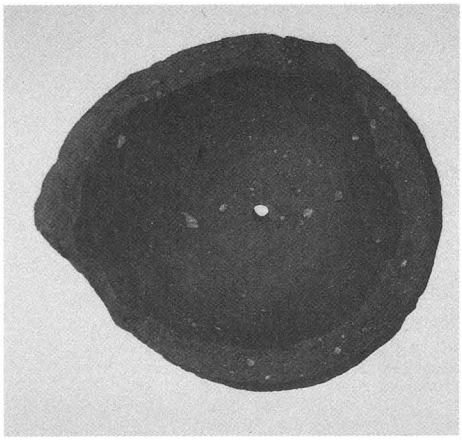
遺構外38



遺構外37



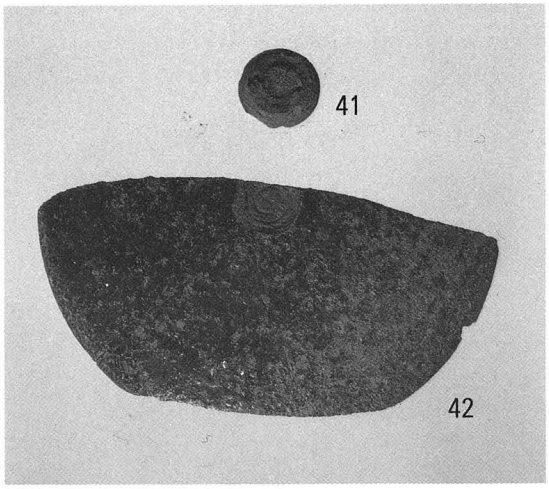
遺構外40



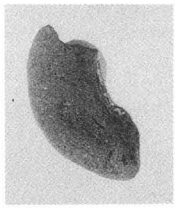
遺構外39

遺構外47

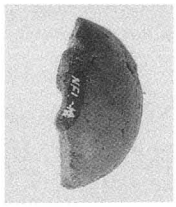
遺構外41＋42



遺構外41・42

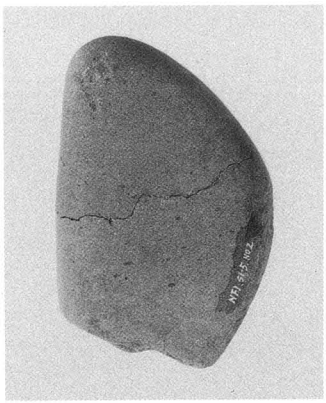


遺構外43

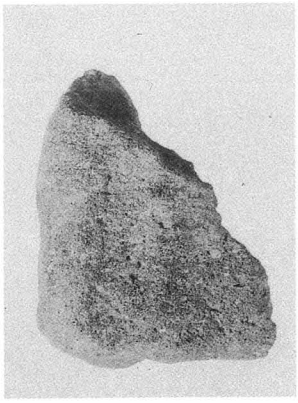


遺構外44

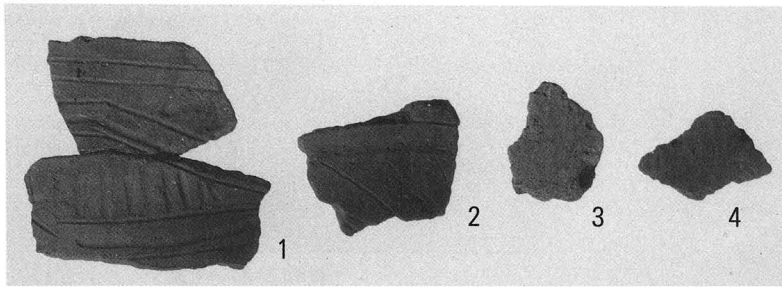
遺構外45



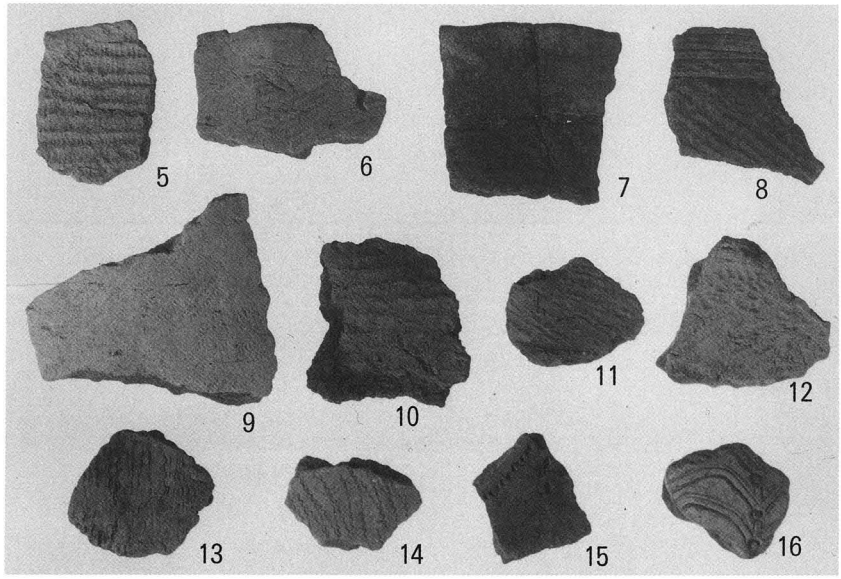
遺構外48



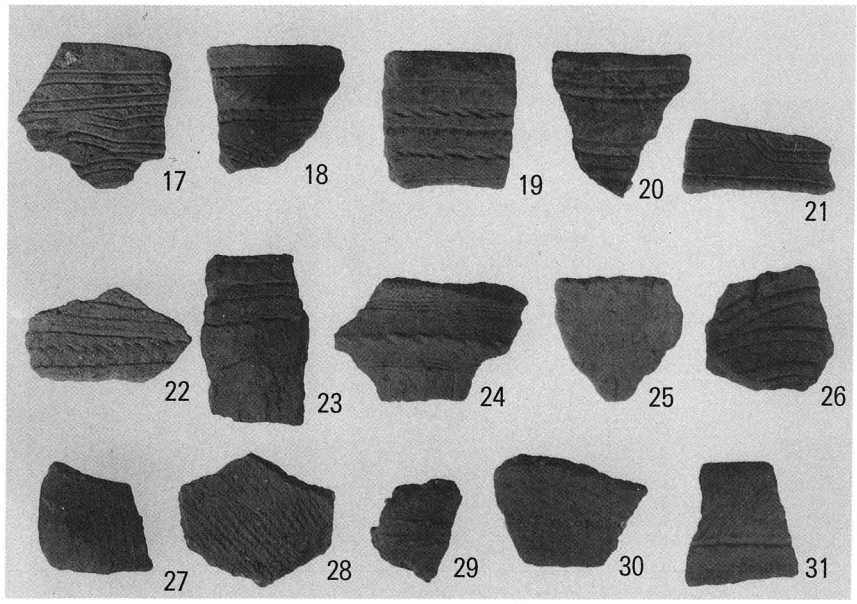
遺構外46



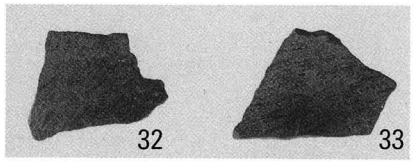
遺構外縄文土器(1)



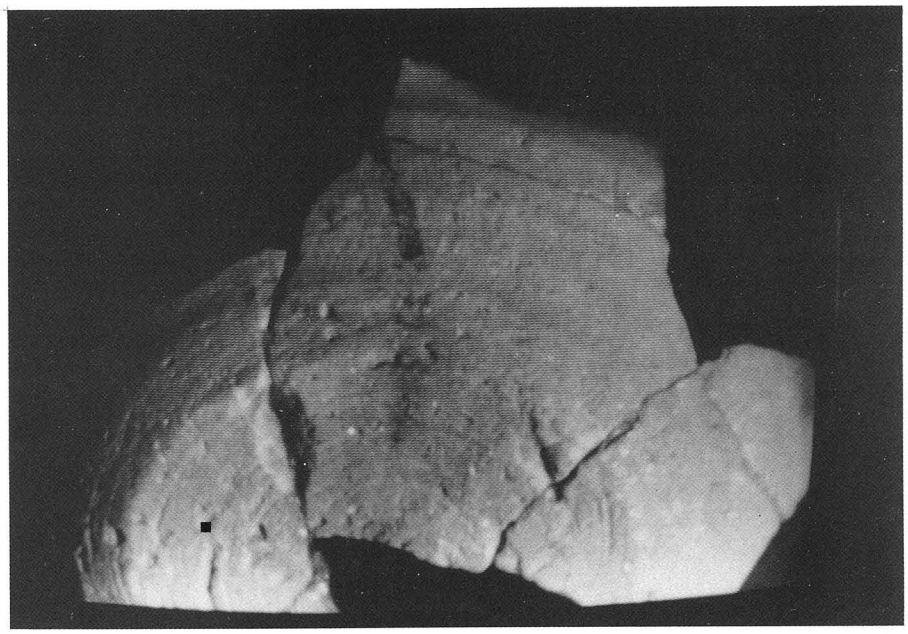
遺構外縄文土器(2)



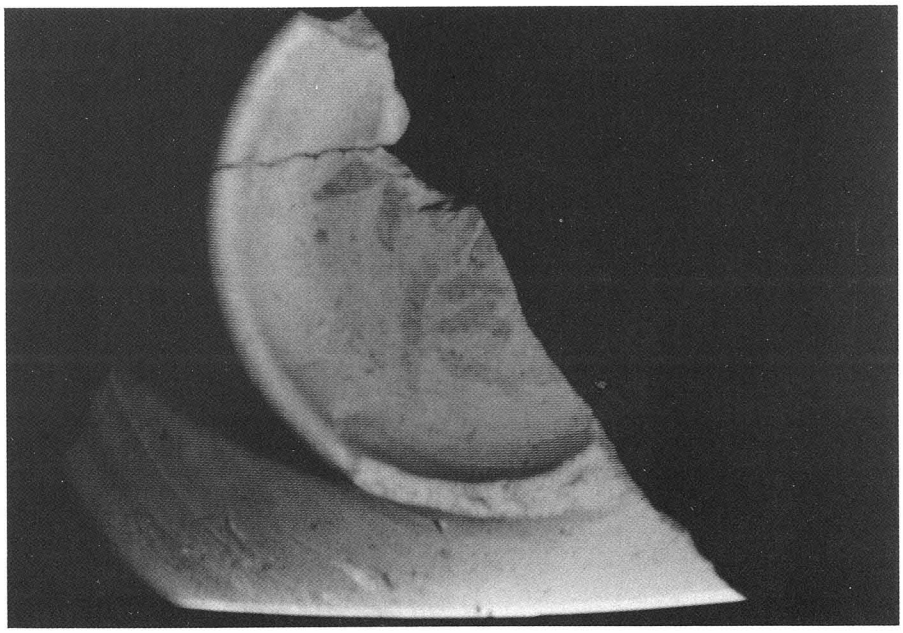
遺構外縄文土器(3)



遺構外弥生土器



墨書土器赤外線写真（４号住居址９）



墨書土器赤外線写真（４号住居址14）

報告書抄録

ふ り が な	ふたまた　いせき		
書　　名	二又　遺跡		
副 書 名	―― ミニゴルフ場造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 ――		
巻　　次			
シ リ ー ズ 名			
シ リ ー ズ 番 号			
編 者 名	関口　満	著 者 名	福田礼子　　関口　満
編 集 機 関	土浦市遺跡調査会		
所 在 地	〒300-0811　茨城県土浦市上高津１８４３		
発 行 年 月 日	西暦２００２年３月３１日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ふたまたいせき 二又遺跡	つちうらしおおあざ 土浦市大字 なかむらにしね 中村西根	08-203	037 （旧A-38）	36度 3分 24秒	140度 5分 25秒	19940906 ～ 19940928	約520㎡	常総実業株式会社のミニゴルフ場建設工事事業による

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二又遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居址　3軒	土師器・須恵器・滑石製紡錘車・砥石・鉄製品・環状土製品・管状土製品・砥石	6号住居址から、5世紀後葉段階の陶邑窯産と考えられる須恵器坏身が完形で出土。 6世紀後半に位置付けられる5号住居址カマドから、耳環や玉類を模したと考えられる土製品が出土。 住居址の内、2号住居址は壁隅にカマドが作られている。 9世紀後葉の4号住居址からは、土師器を主体として土器類が出土し、その中には墨書土器やタール付着土器、須恵器の鉄鉢形土器破片も出土。 この他、遺構外出土として縄文時代の土器片や土製玦状耳飾り・石器が出土。 弥生時代の土器片が数点出土している。
		平安時代	竪穴住居址　3軒	土師器・須恵器・灰釉陶器・墨書土器・タール付着土器・転用硯・鉄製品・砥石	

二　又　遺　跡

── ミニゴルフ場造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 ──

発　行　日　2002年３月31日
編　　集　土浦市遺跡調査会
発　　行　土浦市教育委員会
問い合わせ先　上高津貝塚ふるさと歴史の広場
300－0811　茨城県土浦市上高津1843
TEL 0298(26)7111
印　　刷　㈱石崎印刷土浦店